# Ⅰ　平成 28 年度事業概要

## 平成 28 年度社員総会報告

日　時：平成 28 年 7 月 16 日（土曜日）　午前 10：00 ～ 12：00
場　所：東京都江東区青海 2-2-1（東京国際交流館　プラザ平成　国際交流会議場）

### 新規加盟校紹介

平成 28 年度新規加盟校 8 校が紹介され、1 校の大学名変更が報告された。

現在、加盟校数は 4 年制大学 157 校、短期大学は 13 校、計 170 校になったことが報告された。

新規加盟校は、健康科学大学、国際医療福祉大学（成田看護学部　看護学科）、修文大学、松蔭大学、聖泉大学、東京医療学院大学、姫路獨協大学、八戸学院大学（八戸学院短期大学　看護学科平成 28 年度募集停止により）。

姫路大学は、旧近大姫路大学より大学名変更。

### 審議事項

・野口眞弓業務執行理事より平成 27 年度事業報告について、長澤　正志財務担当理事より平成 27 年度決算報告について、説明され承認された。

・太田喜久子監事より平成 28 年 5 月 17 日に平成 27 年度の監査を行った結果、理事の職務の執行、業務報告について定款に従い、本協会の事業の状況を正しく示しているものと認め財産の状況ならびに決算書類及び事業報告書については

① 会計帳簿は記載すべき事項を正しく記載し、貸借対照表及び正味財産増減計算書は会計帳簿に基づき作成されている。

② 貸借対照表、及び正味財産増減計算書は、一般に公正妥当と認められる会計処理に従い、協会の財産状況を正しく表示していることを認める。

③ 付随明細書は記載すべき事項を正しく示していることが説明され、承認された。

・定款第 2 条（事務所）の一部改定について、野口眞弓業務執行理事より事務所移転について説明され、事務所の所在地を新宿区から千代田区に変更することが承認された。

・任期満了による、鎌田　美智子理事（神戸常盤大学）、佐々木　秀美理事（広島文化学園大学）の退任が報告された。

・荒賀　直子理事（甲南女子大学）の学内役職変更による辞任を承認した。

・岡田　由香監事（岐阜医療科学大学）の学内役職変更による辞任を承認した。

・小川　妙子氏（甲南女子大学）の理事選任について承認した。

・清水　房枝氏（京都光華女子大学）、奥田　泰子氏（四国大学）の理事選任を承認した。

・野並　葉子氏（神戸女子大学）の監事選任を承認した。

・島袋　香子理事（北里大学）、山本　真千子理事（茨城キリスト教大学）、林　優子理事（大阪医科大学）の重任を承認した。

### 報告事項

・平成 28 年度事業活動について野口眞弓業務執行理事より事業の状況について報告された。続い

て収支予算案について長澤正志財務担当理事より予算について報告された。

・理事会により選任された近藤潤子氏について名誉会長の委嘱状を交付した。

# 平成 27 年度一般社団法人日本私立看護系大学協会収支決算書

（平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日）

〈収入〉　（単位：円）

| 科目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 会費 | 51,300,000 | 51,000,000 | 300,000 | 会　費@ 300,000 × 162 校<br>未納校 1 校<br>入会金@ 200,000 × 12 校 |
| 銀行利息 | 20,000 | 7,708 | 12,292 | 普通預金利息 6,995 円　事業費利息 713 円 |
| 前期末未収入金収入 | 0 | 300,000 | △ 300,000 | 26 年度会費未納金 |
| 期末仮払金回収収入 | 0 | 5,150,716 | △ 5,150,716 | 26 年度事業費精算金他 |
| 預り金 | 2,000,000 | 2,068,314 | △ 68,314 | 源泉所得税、住民税、社会保険料 |
| 収入小計 | 53,320,000 | 58,526,738 | △ 5,206,738 | |
| 期末仮払未収入金 | 0 | △ 419,790 | 419,790 | 27 年度事業費精算金 |
| 前年度繰越金 | 19,693,000 | 19,693,788 | △ 788 | |
| 合計 | 73,013,000 | 77,800,736 | △ 4,787,736 | |

〈支出〉

| 科目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 事業費 | 47,369,000 | 43,215,022 | 4,153,978 | |
| 大学における教育に関する事業 | 7,268,000 | 5,589,439 | 1,678,561 | |
| 学術研究および学術研究体制に関する事業 | 2,603,000 | 2,260,961 | 342,039 | |
| 研究助成事業 | 5,642,000 | 4,866,989 | 775,011 | |
| 教育、学術および文化の国際交流事業 | 1,993,000 | 1,347,417 | 645,583 | セミナー開催計画修正により講師人数を減じ、謝礼金および交通費支出が当初予定より少なかったための支出減 |
| 大学運営・経営に関する事業 | 6,600,000 | 5,949,905 | 650,095 | |
| 関係機関との提携等に関する社会的事業 | 1,870,000 | 1,857,321 | 12,679 | |
| 会報・出版等の広報に関する事業 | 1,371,000 | 1,305,442 | 65,558 | |
| 将来構想検討に関する事業 | 400,000 | 437,898 | △ 37,898 | |
| 人件費 | 6,042,000 | 6,617,751 | △ 575,751 | |
| 消耗品費 | 1,000,000 | 1,189,080 | △ 189,080 | |
| 旅費交通費 | 3,020,000 | 3,362,920 | △ 342,920 | 理事会等出席交通費 |
| 印刷費 | 2,500,000 | 3,259,960 | △ 759,960 | 年報印刷費 |
| 会議費 | 3,810,000 | 2,521,751 | 1,288,249 | 総会、理事会経費 |
| 賃借料 | 3,250,000 | 2,648,188 | 601,812 | 事務所賃料、総会集計機リース料 |
| 管理費 | 8,810,000 | 9,487,962 | △ 677,962 | |
| 人件費 | 4,030,000 | 4,066,031 | △ 36,031 | 事務局員等人件費 |
| 消耗品費 | 600,000 | 426,454 | 173,546 | 文具他 |
| 光熱水費 | 360,000 | 309,199 | 50,801 | 事務所光熱費 |
| 旅費交通費 | 50,000 | 61,380 | △ 11,380 | 近地交通費 |
| 通信費 | 750,000 | 971,857 | △ 221,857 | 切手・郵送費、電話・電報代、振込手数料 |
| 印刷費 | 500,000 | 732,006 | △ 232,006 | コピー機利用料 |
| 賃借料 | 1,500,000 | 1,765,459 | △ 265,459 | 事務所賃料、コピー機・電話機リース料 |
| 会議費 | 200,000 | 1,450 | 198,550 | 管理会議等 |
| 業務委託費 | 750,000 | 1,084,126 | △ 334,126 | Web 管理契約料・会計指導料 |
| 租税公課 | 70,000 | 70,000 | 0 | 法人都民税 |
| 将来構想特別会計繰入金 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | 将来構想特別会計積立金 |
| 維持管理特別会計繰入金 | 0 | 0 | 0 | 維持管理特別会計積立金 |
| 退職給付引当金繰入額 | 380,000 | 385,202 | △ 5,202 | |
| 預り金 | 2,000,000 | 2,051,160 | △ 51,160 | 源泉所得税、住民税等、社会保険料 |
| 前期末未払金支払支出 | 1,000,000 | 2,070,418 | △ 1,070,418 | |
| 期末未払金 | △ 1,000,000 | △ 898,990 | △ 101,010 | |
| 支出小計 | 59,559,000 | 57,310,774 | 2,248,226 | |
| 次年度繰越金 | 13,454,000 | 20,489,962 | △ 7,035,962 | 現金 60,011 円　預金 20,429,951 円 |
| 合計 | 73,013,000 | 77,800,736 | △ 4,787,736 | |

## 平成 27 年度将来構想特別会計決算書

（平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日）

〈収入〉 （単位：円）

| 科　　目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差　　異 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 平成26年度繰入金 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | |
| 利息収入 | 136,000 | 140,861 | △ 4,861 | |
| 前年度繰越金 | 16,975,000 | 16,975,501 | △ 501 | |
| 合　　計 | 18,111,000 | 18,116,362 | △ 5,362 | |

〈支出〉

| 科　　目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差　　異 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 次年度繰越金 | 18,111,000 | 18,116,362 | △ 5,362 | |
| 合　　計 | 18,111,000 | 18,116,362 | △ 5,362 | |

## 平成 27 年度維持管理特別会計決算書

（平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日）

〈収入〉 （単位：円）

| 科　　目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差　　異 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 平成26年度繰入金 | 0 | 0 | 0 | |
| 利息収入 | 0 | 0 | 0 | |
| 前年度繰越金 | 8,000,000 | 8,000,000 | 0 | |
| 合　　計 | 8,000,000 | 8,000,000 | 0 | |

〈支出〉

| 科　　目 | 平成27年度予算 | 平成27年度決算 | 差　　異 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 次年度繰越金 | 8,000,000 | 8,000,000 | 0 | |
| 合　　計 | 8,000,000 | 8,000,000 | 0 | |

# 平成 28 年度一般社団法人日本私立看護系大学協会予算書

（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

〈収入〉　（単位：千円）

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 会費 | 52,200 | 51,300 | 900 | 会　費@ 300 × 170 校<br>入会金@ 200 × 6 校 |
| 銀行利息 | 20 | 20 | 0 | |
| 雑収入 | 480 | 0 | 480 | 40 周年記念式典祝賀会参加費 |
| 将来構想特別会計繰出金 | 13,000 | 0 | 13,000 | 40 周年記念事業費・事務局移転費用 |
| 敷金還付金回収収入 | 819 | 0 | 819 | 旧事務所敷金 |
| 預り金 | 2,500 | 2,000 | 500 | 源泉所得税、住民税、社会保険料 |
| （収入小計） | 69,019 | 53,320 | 15,699 | |
| 前年度繰越金 | 20,490 | 19,693 | 797 | 現金及び普通預金 |
| 合計 | 89,509 | 73,013 | 16,496 | |

〈支出〉

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 事業費 | 49,802 | 47,369 | 2,433 | |
| 大学教育委員会 | 3,860 | 7,268 | △ 3,408 | |
| 研究活動委員会 | 1,359 | 2,603 | △ 1,244 | |
| 研究助成事業 | 5,722 | 5,642 | 80 | |
| 国際交流委員会 | 1,225 | 1,993 | △ 768 | |
| 大学運営・経営委員会 | 2,345 | 6,600 | △ 4,255 | |
| 渉外委員会 | 1,670 | 1,870 | △ 200 | |
| 広報委員会 | 1,301 | 1,371 | △ 70 | |
| 将来構想検討委員会 | 525 | 400 | 125 | |
| 40 周年記念事業費 | 8,250 | 0 | 8,250 | |
| 人件費 | 10,020 | 6,042 | 3,978 | 事務局員等人件費 |
| 消耗品費 | 1,000 | 1,000 | 0 | 総会用品、会長表彰記念品代等 |
| 旅費交通費 | 3,020 | 3,020 | 0 | 理事会等出席交通費 |
| 印刷費 | 2,850 | 2,500 | 350 | 年報印刷費 |
| 賃借料 | 4,150 | 3,250 | 900 | 事務所賃料、総会集計機リース料 |
| 会議費 | 2,380 | 3,810 | △ 1,430 | 総会、理事会経費 |
| 業務委託費 | 125 | 0 | 125 | |
| 管理費 | 12,960 | 8,810 | 4,150 | |
| 人件費 | 6,680 | 4,030 | 2,650 | 事務局員等人件費 |
| 消耗品費 | 750 | 600 | 150 | 文具他 |
| 光熱水費 | 450 | 360 | 90 | 事務所光熱費 |
| 旅費交通費 | 50 | 50 | 0 | 近地交通費 |
| 通信費 | 750 | 750 | 0 | 切手・郵送費、電話・電報代、振込手数料 |
| 印刷費 | 500 | 500 | 0 | コピー機利用料 |
| 賃借料 | 2,100 | 1,500 | 600 | 事務所賃料、コピー機・電話機リース料 |
| 会議費 | 200 | 200 | 0 | 管理会議等 |
| 業務委託費 | 1,410 | 750 | 660 | 公認会計士業務委託契約料、Web 管理契約料、事務所移転業務委託料 |
| 租税公課 | 70 | 70 | 0 | 法人都民税 |
| 敷金支出 | 4,000 | 0 | 4,000 | 新事務所敷金 |
| 将来構想特別会計繰入金 | 1,000 | 1,000 | 0 | 将来構想特別会計積立金 |
| 維持管理特別会計繰入金 | 0 | 0 | 0 | 維持管理特別会計積立金 |
| 退職給与引当金繰入額 | 270 | 380 | △ 110 | |
| 預り金 | 2,500 | 2,000 | 500 | 源泉所得税、住民税等、社会保険料 |
| 前期末未払金支払支出 | 1,000 | 1,000 | 0 | |
| 期末未払金 | △ 1,000 | △ 1,000 | 0 | |
| （支出小計） | 66,532 | 59,559 | 6,973 | |
| 次年度繰越金 | 18,977 | 13,454 | 5,523 | （予備費を含む） |
| 合計 | 89,509 | 73,013 | 12,496 | |

## 平成 28 年度将来構想特別会計予算書

（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

〈収入〉 （単位：千円）

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 平成28年度繰入金 | 1,000 | 1,000 | 0 | |
| 利息収入 | 136 | 136 | 0 | |
| 前年度繰越金 | 18,111 | 16,975 | 1,136 | |
| 合計 | 19,247 | 18,111 | 1,136 | |

〈支出〉

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 周年記念事業繰出金 | 8,250 | 0 | 8,250 | 40 周年記念事業費 |
| 事務所移転費用繰出金 | 4,750 | 0 | 4,750 | 事務所移転にかかる敷金および移転費用 |
| 次年度繰越金 | 6,247 | 18,111 | △ 11,864 | |
| 合計 | 19,247 | 18,111 | 1,136 | |

## 平成 28 年度維持管理特別会計予算書

（平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日）

〈収入〉 （単位：千円）

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 平成28年度繰入金 | 0 | 0 | 0 | |
| 利息収入 | 0 | 0 | 0 | |
| 前年度繰越金 | 8,000 | 8,000 | 0 | |
| 合計 | 8,000 | 8,000 | 0 | |

〈支出〉

| 科目 | 平成28年度予算 | 平成27年度決算 | 差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 次年度繰越金 | 8,000 | 8,000 | 0 | |
| 合計 | 8,000 | 8,000 | 0 | |

## 平成 28 年度理事会報告

## 平成 28 年度第 1 回定例理事会報告

日　時：平成 28 年 5 月 28 日（土曜日）　13：00 ～ 17：00
場　所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター（B1 E ミーティングルーム）
出席者：18 名（総数 22 名）

### 審議事項

１．平成 28 年度事業活動方針について、研修体系のあり方と事務局の強化などの基盤強化と合わせて、研修事業の充実化を図りたいと説明された。研修事業の体系化について、将来構想検討委員会より、研修事業を体系化し、年度を重ねるごとに見えてきた様々な課題を検討していきたいと意見が出された。また、研修の充実化を図るためには従来の方式ではやっていけないかもしれないので、委員会を横断的に実施することも考えられる。実施体制の検討は理事会で相談しながら進めていき、研修事業の体系化を進めていきたいと意見が出された。また、平成 28 年度事業活動計画と予算について各委員会委員長より説明され、審議の結果承認された。

２．研究活動委員会より、研究助成の応募状況について報告された。また選考委員について承認を得た。選考委員会は 7 月 17 日に開催する予定であると説明された。

３．平成 28 年度予算の次年度繰越金については、事務局の強化、事業の充実強化を図っているので平成 29 年度以降は減額が予想されると説明された。また、事務所移転に係る経費は将来構想特別会計からの支出となっているが、繰越金があるので一般管理費から支出してもよいのではないかとの意見が出されたが、これまでの審議の経緯と事業内容を勘案し、将来構想特別会計から支出することとなった。

４．役員選任について、新理事に、清水房枝先生（京都光華大学）、小川妙子先生（甲南女子大学）、奥田泰子先生（四国大学）、新監事に野並葉子先生（神戸女子大学）が選出され、総会に推挙することが承認された。

５．平成 28 年度新規加盟校について、八戸学院大学は短期大学の看護学科廃止による課程変更、姫路大学は近大姫路大学より名称変更であることが説明され、8 校の新規加盟が承認された。

６．平成 28 年度総会と 40 周年記念式典について委員会より説明された。

７．本年度より各委員会の会計を法人事務局が執行するにあたり具体的な方法が審議された。事務局が、出された意見を要約し修正案を提示し、メール審議することになった。

８．事業活動計画書（諸規程集様式 1）書式変更について、会長より中長期の計画が形骸化していると指摘があり、様式 1 の変更を検討し承認された。

９．事務局より事務局人事・人員募集およびの事務局移転進捗状況について説明され、事務局移転について、井部会長、佐々木副会長、野口業務執行理事、長澤財務担当理事と事務局をプロジェクトメンバーとし、進めることが承認された。

10. 熊本地震被災地の加盟校への対応について、被災した熊本看護福祉大学、熊本保健科学大学の 2 校について平成 28 年度の会費は本部より支出することが承認された。

**報告事項**

1．平成 27 年度事業活動報告と決算について各委員会代表理事より報告された。

2．平成 27 年度決算報告について会費収入と期末未収入金の記載について、適切であるが分かりにくいため、分かりやすくする必要があるという意見が出された。他に分かりやすい記載方法があるか、公認会計士に相談することとなった。

## 平成 28 年度第 2 回定例理事会報告

日　時：平成 28 年 7 月 23 日（土曜日）　13：00 ～ 14：10
場　所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター（B1 E ミーティングルーム）
出席者：14 名（総数 22 名）

### 審議事項

１．平成 28 年度事業執行体制および事務局体制について、社員総会、会長、副会長、監事、理事会、業務執行理事、法人事務局の位置を確認し、業務執行理事は 2 名とし、そのうち 1 名を財務担当とすることとした。各委員会の理事・委員について確認し、委員が未定の委員会については後日確定し事務局に知らせることとなった。

２．平成 29 年 1 月 22 日 13 時に臨時理事会を開催し、平成 29 年度の事業活動等について審議することが承認された。また、11 月の第三回定例理事会日程は 11 月 25 日（金）13 時から開催することに変更された。さらに定例理事会終了後、委員長会議を開催することが承認された。

３．事務局移転について説明された。
新事務所住所は東京都千代田区九段南 4−6−10
新電話番号は 03-6261-2071、新ファクス番号は 03−6261−2072

４．平成 28 年度研究助成選考結果について説明された。また、総会時発表の研究助成採択率の数値の誤りについて看護学研究奨励賞 53.4％、若手研究者研究助成 42.2％、国際学会発表者助成 37.7％と訂正された。

### 報告事項

１．平成 28 年度総会・講演会報告についてアンケートの集計結果に基づき報告された。

２．広報委員会より会報 36 号記事構成の説明と協力依頼がされた。

## 平成 28 年度第 3 回定例理事会報告

日　時：平成 28 年 11 月 25 日（金）　13：00 ～ 16：15
場　所：日本私立看護系大学協会　事務所
出席者：18 名（総数 22 名）

### 審議事項

1．定款と細則等の整備について審議し、次回臨時理事会において継続審議することとした。
2．理事および監事等選出内規の変更について、現行の理事の選出内規は度々加筆されており、分かりづらい。理事にとっても選挙を経て選出される方が良い。プロセスに改善の余地があると確認されている。現在は会員校 170 校と規模が大きくなり、透明性を高めるためにも選挙は妥当との意見が出され、臨時理事会の検討課題とした。
3．各委員会が開催する研修体系について、開催地の利便性を考慮しつつ、加盟校の意識の向上・能力形成を促すよう、平成 29 年度の研修を企画することとした。
4．平成 28 年度広報活動について、当協会の広報の媒体を、ホームページ・年報・会報に集約し平成 29 年度は、研修事業等の様々なお知らせをメールにて発信し周知に努めることとした。
5．平成 29 年度社員総会の講演について検討した。

### 報告事項

1．平成 28 年度事業活動中間報告・予算執行状況について報告された。
2．中期決算及び事務所移転に係る会計について報告された。

## 平成 28 年度臨時理事会報告

日　時：平成 28 年 1 月 22 日（日）　13：00 ～ 16：50
場　所：日本私立看護系大学協会　事務所
出席者：20 名（総数 22 名）

### 審議事項

１．現行の役員選出規程について、整理、確認し、平成 28 年度第 4 回定例理事会にて継続審議することとした。新しい役員選出規程についても審議し、併せて継続審議とすることとした。

２．ホームページ改修について、改修を進めることを確認し、ホームページについては広報委員会が責任を持ち、事務局が運用することとした。現在、会員専用ページで閲覧できる教員名簿は個人情報保護の観点から掲載しないこととした。

### 報告事項

１．平成 29 年度社員総会の講演について報告された。

２．広報委員会より、研修会と事業活動の報告書について、報告書は冊子とせず、ホームページで報告し、さらに研修会の動画配信を積極的に進めていくことが報告された。

## 平成 28 年度第 4 回定例理事会報告

日　時：平成 29 年 3 月 12 日（日）13：00 ～ 16：00
場　所：日本私立看護系大学協会　事務所
出席者：15 名（総数 22 名）

### 審議事項

１．役員候補者選出について 一般社団法人日本私立看護系大学協会役員候補者選出規程及び一般社団法人日本私立看護系大学協会選挙管理規程について審議し、平成 29 年度第 1 回理事会にて継続審議とする。

２．以下の諸規程について審議した。

①一般社団法人日本私立看護系大学協会理事及び監事等の選出内規
②一般社団法人日本私立看護系大学協会理事会運営規程
③一般社団法人日本私立看護系大学協会情報公開規程
④一般社団法人日本私立看護系大学協会個人情報の保護に関する規程
⑤一般社団法人日本私立看護系大学協会個人情報保護に関して（HP 掲載用）
⑥一般社団法人日本私立看護系大学協会特定個人情報規程
⑦一般社団法人日本私立看護系大学協会基金取扱規程
⑧一般社団法人日本私立看護系大学協会研究助成事業規程施行細則について

３．定款の変更について審議し、平成 29 年度第 1 回定例理事会において継続審議することとした。

４．平成 29 年度事業活動計画と予算（案）について、大学における教育に関する事業、大学における研究に関する事業、教育・学術および文化の国際交流事業、大学運営・経営に関する事業、関係機関との提携等に関する社会的事業、会報・出版等の広報に関する事業より平成 29 年度活動計画が説明され予算と共に承認した。

５．平成 29 年度一般社団法人日本私立看護系大学協会予算について承認した。

６．平成 29 年度一般社団法人日本私立看護系大学協会組織体制と平成 29 年度役員選出について審議し、平成 29 年度第 1 回定例理事会において継続審議することとした。

### 報告事項

１．平成 29 年度研究助成募集要項について報告された。
２．平成 28 年度一般社団法人日本私立看護系大学協会決算（中間報告）について報告された。
３．平成 28 年度会長表彰について報告された。
４．事務局専任職員退職金規定について、修正と報告をされた。
５．40 周年記念誌発刊について報告された。

# Ⅱ　平成 28 年度事業活動報告

## 1．大学における教育に関する事業

### 趣旨

①教育内容（カリキュラム）、方法、評価の調査研究
②教員組織、教員の質・能力の向上、教育能力・施設設備の調査研究
③教育に関するセミナー、ワークショップ等の実施
④上記①～③に関連する本法人の提言又は要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告

### 代表者および委員会構成員（◎：代表者　○：担当理事）

◎星　　直子（帝京大学）
○惠美須文枝（亀田医療大学）
○大島　弓子（豊橋創造大学）
○小川　妙子（甲南女子大学）
砂見　緩子、藤木眞由美、伊藤　文子（帝京大学）、平山香代子、渡辺八重子、古賀　雄二（亀田医療大学）、古賀　節子、蒔田　寛子（豊橋創造大学）、林　　照子、片平　伸子、白濱郁子（甲南女子大学）

### 活動経過

1）　事業テーマ 1：大学新任教員のための研修会 2016

企画意図：平成 26 年度から継続して企画してきた新任教員の講座は、大学教員として活動する上で、必要かつ個々の大学レベルで対応が難しい知識や情報を、セミナーとして試験的に企画・実施したものである。好評で、継続を要望する声が高く、平成 28 年度も同講座を継続した。

実施日：平成 28 年 9 月 3 日（土）
会　場：大正大学
プログラム：
・講演 1.　大学改革の課題と看護人材の養成
　佐藤　弘毅先生（目白大学学事顧問）
・講演 2.　私立大学とは何か　－私立大学の基礎知識－
　上杉　道世先生（大正大学理事長特別補佐・質保証推進室長・客員教授）
・講演 3.　大学の教員になるということ
　夏目　達也先生（名古屋大学高等教育研究センター教授）

結果：参加者 100 名。ほとんどが入職 4 年目未満の助手、助教であった。私立大学の現状と課題、大学教員としての役割をあらためて理解できたという反応だった。3 回目となる今年度も、参加者の反応はほぼ例年と同様の結果だった。東京以外での開催の要望も継続してあった。Web 上の受講希望もあり、今年度は協会 HP に、当日の録画をアップした。

2）　事業テーマ 2：変革期にある大学における教育のリーダーシップ、教員の育ちについて考える

企画意図：社会の変化、大学改革の方針が打ち出される中、看護系大学の急増は、教員の量的確

保ばかりでなく、教員の質保証の障害となっている。質・量ともに変化が求められる中、あらゆる職位に於いて、教員の教育に関する課題は存在し、解決が急務である。中でも教員組織全体の意識・教育力に大きく影響を及ぼす管理、教員教育をする立場にある教員（近い将来その立場になる教員）が重要であると考え、今年度はこの職位に焦点を当て、教育のリーダーシップ、教員の育ちをテーマにセミナーを企画した。

実施日：平成 28 年 10 月 2 日（日）

会　場：東京国際交流館プラザ平成

プログラム

・基調講演／大学・学部のリーダーの責務と役割、有効な大学組織作りに向けて

小川　哲生先生（いわき明星大学理事長、明星学苑副理事長、明星大学教授、前明星大学学長）

・パネルデイスカッション

パネリスト

宮子あずさ先生（東京女子医科大学大学院非常勤講師）、松澤　和正先生（帝京大学教授）、藤井　徹也先生（聖隷クリストファー大学教授）、山中　純瑚先生（甲南女子大学教授）

・グループデイスカッション／講演、パネルデイスカッションをふまえて、問題提起や情報交換

結果：参加者 44 名。ほとんどが、在職 10 年以上の教授、学科長、学部長であった。反応は日頃問題と感じていた事柄の核心に迫ることができた、大学組織のリーダーの在り方を考えるきっかけになったという点に集約される。グループディスカッションを行ったことは、各大学の情報交換や課題を共有する者同士のネットワークづくりになった。継続して企画を希望する声が出ていた。

## まとめ（2 つの事業を通して）

2 つの事業の企画意図は達成されたと考える。副次的な効果としては、参加者が所属大学を離れ、他大学の教員と交流すること、意見交換することによって、ネットワークをつくり、自らの立場を客観視することにも役立つものであったと考える。

大学における教育、教員の質の向上に関するものは多岐にわたり、対象とする教員の職位も、それぞれの対象者のニーズも多様である。両企画とも個人や個々の大学が対応し、努力するだけでは間に合わない現状を補う上でのほんの一部にすぎない。言いかえれば、何を企画しても必要性があり満足を得られる一方、量的にも質的にも、変化に対応することは困難である。課題が山積し、対策が急務である現状において、本協会の一委員会として、「教育のための事業活動」をいかに焦点化し、効果的に展開していくかは重要である。

≪委員会開催≫

第 1 回　4 月 23 日（土）　10：00 ～ 15：00　事務局

前年度企画の評価と今年度企画の検討、具体案策定

第 2 回　5 月 28 日（水）　理事会終了後　事務局

講師への依頼、会場費用等の詳細の検討

第 3 回　7 月 16 日（土）　15：00 ～ 16：30　東京国際交流館プラザ平成

現地実地踏査

第4回　7月23日（土）　16：00～17：00　東京国際交流館プラザ平成

現地打ち合わせ

新理事との事業計画・進行状況打ち合わせ

第5回　8月8日（月）　大正大学

新任教員のセミナー現地実地踏査、進行状況等打ち合わせ

第6回　9月3日（土）　セミナー①の終了後　大正大学

研修会評価、10月セミナー②「変革期にある大学における教育のリーダーシップ」へ向けて打ち合わせ

第7回　10月2日（日）　セミナー②の終了後　東京国際交流館プラザ平成

研修会評価、以後の会議予定立案、役割分担の確認

第8回　12月17日（土）　13：00～16：00　事務局

平成28年度評価概括、平成29年度役割分担、活動計画立案

第9回　1月22日（日）　理事会終了後～17：00　事務局

平成28年度評価、平成29年度活動計画具体案、予算案

第10回　3月12日（日）　理事会終了後　事務局

平成29年度活動計画具体案詳細、予算案再検討

●理事間、事務局も交え、メールにより意見交換等の会議を頻回に行った。

## 今後の課題

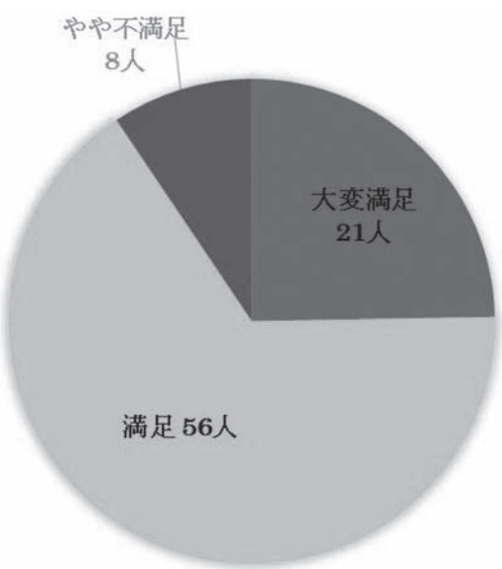
平成28年3月文部科学省の新たな答申が出され、大学組織の変革、教育の多様化とカリキュラムの明確化、教員の力量の質的向上などが、大学の存続をかけて取り組むべき課題であることが打ち出された。変革のスピードも早く、従来の様に、単に研究・学生の教育を担うだけではなく、大学組織の理解、教員の質的向上をめざした、FD体制や教員自らの学びが必至である。この様な中、長期的な事業活動は具体的な計画が立てにくい状況にある。そのため短期の事業活動計画を進めながら、あわせて情報収集し、変化を踏まえて長期計画へと発展させていきたい。

再三述べるが、本委員会の担当する事業である、大学における教育、教員の質の向上に関するものはますます多岐にわたり、対象とする教員の職位、ニーズも多様になり、質的にも変化する一方である。今後の事業計画を考える上では、本協会が私立看護系大学の全国組織として担うべき役割、現組織体制における委員会活動全般を再検討した上で、本委員会が担う役割と実効性のある企画の実際について、本格的に協議すべきである。

「大学新任教員のための研修会 2016」
講演および企画についてのアンケート結果
参加：47 校、100 名
アンケート回収数：85 名

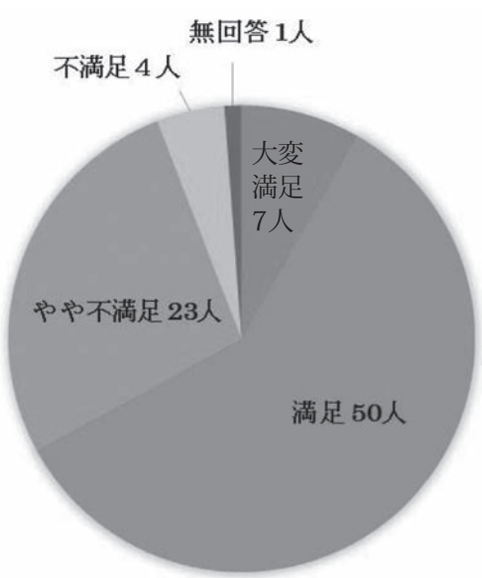
Ⅰ．講演会について

講演 1.「大学改革の課題と看護人材の養成」



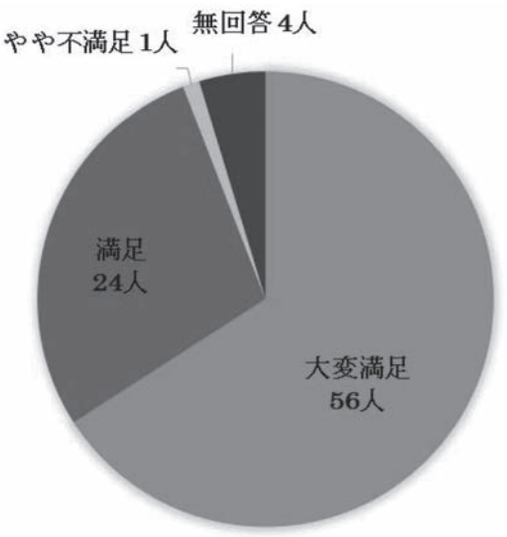

＜ご意見・ご感想＞
・大学改革の方向性がよく理解でき、これからの大学の目指すところがよくわかった。
・大学教育のあり方・概要についてよくわかった。
・大学がどのような看護師を育成していく必要があるのかその重要性について学べた。
・大学で看護学を教授する意味と自分の立場がわかった。
・実際のデータや他職種から見た看護大学教員の役割というのが印象的で意識が高まった。
・全入の学生を対象にしても、大学教育の本来のあり方を目指すことはたやすくはないと思いつつ挑戦してみようと思った。
・丁寧に講義をしていただき、要点がわかりやすく、役立つ内容だった。

講演 2.「私立大学とは何か」～私立大学の基礎知識～




＜ご意見・ご感想＞
・私立大学が成り立っている組織について様々なことを知ることができた。
・国の組織や法律についてわかりやすく教えていただき、法律関係の知識の整理がついた。
・私立大学に関わる法令等を聞きどのようなことを考えていくべきかを知ることができた。
・テキストを参考にもできるのでよかった。
・私立大学のしくみなどがわかりやすく説明されよかった。
・大学の広報的役割を担う教員としての自覚、大学の生き残りも教員が関与していることが十分に理解し努力することが求められていると痛切に感じた。

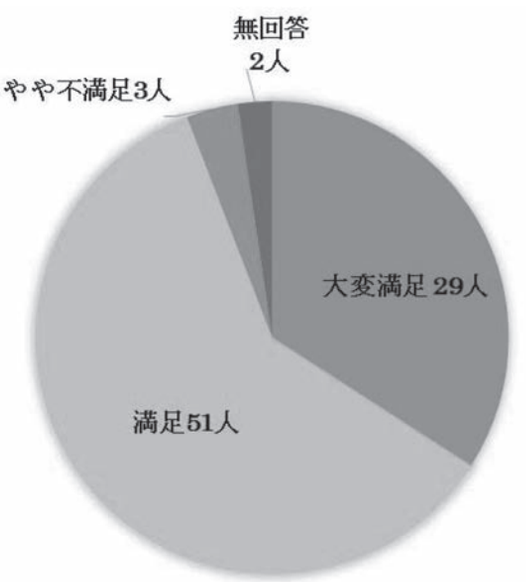
講演 3.「大学の教員になるということ」




＜ご意見・ご感想＞

・実践に役立つツールの紹介があり参考になった。
・教員の能力形成の方法についていくつかの方法を提示していただき、この先の自身のキャリアアップに活かしていきたいと思った。
・実践的な内容でとてもわかりやすく今後に活用できると感じた。
・いろいろな参加者の意見をききながら進めてくださったので、とても楽しくきくことができた。
・難しい内容もこれほどわかりやすい言葉で教えることができるのか、と本当に驚いた。「わかる」ということを私自身が体験したことでこのような形で学生に関わりたいと思った。
・考えながら講演を受けることができ、肌でアクティブラーニングの一辺を感じることができた。こんな授業をつくってみたいと思った。
・これから、学生だけではなく、教員である私たちが主体的に考え、発信できる努力をしていきたい。

Ⅱ．企画自体の評価について




＜ご意見・ご感想＞

・大変参考になり、勉強になった。
・大学の基本的なことについて知識がなかったので大変参考になった。
・本日の講義は実践的でとても有益だった。
・私立大学の流れや組織など今日改めてきくことで、まだまだ理解できていないことがわかった。
・大学に戻って他の先生とも共有しようと思う。
・このような研修は何年目であってもとても学びになると感じた。
・教育系機関（大学、大学院）で働くということは、経営や社会背景をも理解した上で、今の学生の特徴やニーズに合わせつつ、大学や社会から担うミッションと、自己実現の両側面を遂行していかなくてはいけないことを再認識した。

Ⅲ．今後本事業で希望するテーマや開催時期、場所などについて

【開催時期についてのご意見】

・もう少し早い時期（6-7 月）での開催希望
・時期は 7 月ごろが新人にはよいと思う
・時期は夏休み期間が参加しやすい　× 3
・長期休暇が取りやすい時期の開催希望
・実習指導は前期開催を望む

【開催地・開催方法についてのご意見】

・地方での開催希望　× 2
・中部地方での開催希望
・関西方面での開催希望
・開催地は東京が便利でよい
・Web での受講が希望

【テーマ・その他】

＜教育・指導について＞

・授業展開の具体的方法・指導案作成など教育力を向上させるような研修
・授業、演習、実習で取り組んでいるものの具体例の研修
・実習に関することや留学生対策、入学前後学習の方法、考え方
・授業展開のまずい例、良い例の教材化、職位に応じた研修・授業が素晴らしい先生の模擬授業が聞きたい
・学生の生活指導について（カウンセリング能力）、実習指導の在り方
・大学教員の質が問題になっているため、新人のみならず大学教育とは何か、社会的意味などのテーマで教育学の先生の講義を受けるべきだと思う

＜大学教員として・職位について＞

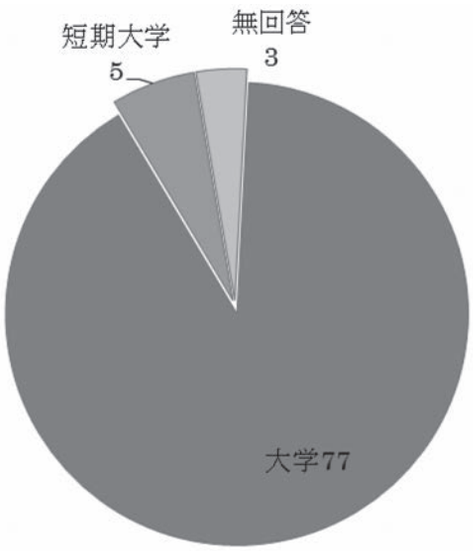
・職位としてのふるまい方、大学の見えないルールへの対応の仕方など希望
・ある意味で若手より問題のため、従来思考の教授たちの行動が変わるような研修会を希望

＜研修スタイル・教育指導以外の具体的テーマについて＞

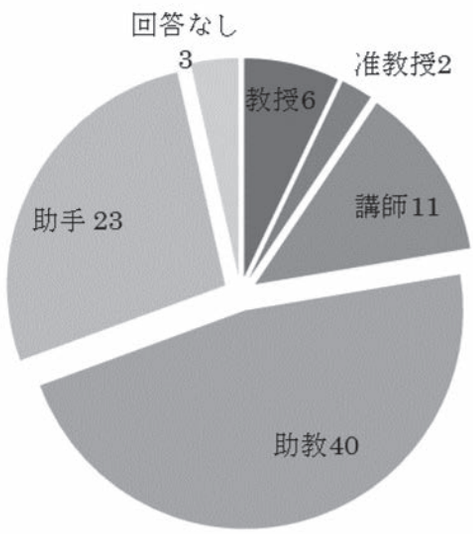
・上の職位が多いと参加を躊躇してしまうため、助教クラスの研修希望
・横のつながりができるテーマ、目的のある研修会など、同じ職位といった細かい研修が希望
・少人数グループでのストレスマネージメント、休日の確保のコツ
・法律的な基本的内容について、教育理論や看護教育について
・若手教員に対する各種研修
・ストレスマネージメントやアンガーコントロール
・午後講演のような How to 的な内容がよい

## Ⅳ．参加者の背景について

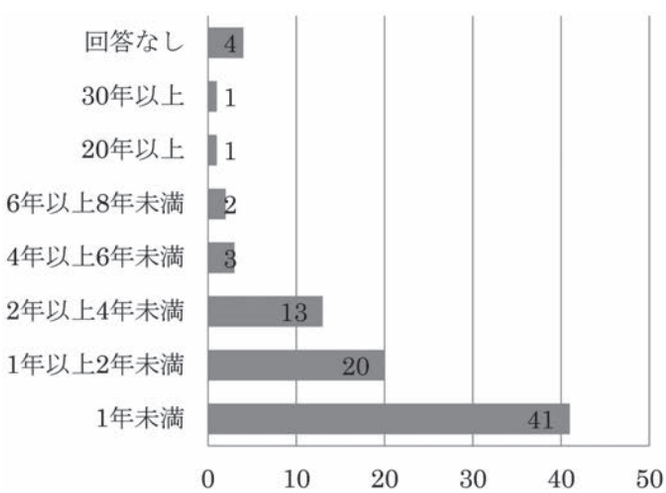
所属（単位：人）



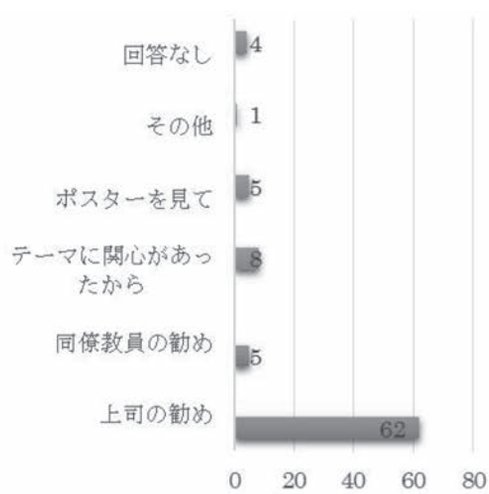

職位（単位：人）




在職期間（単位：人）




参加のきっかけ（単位：人）



**「変革期の大学における教育リーダーシップ、教員の育ちについて考える」**

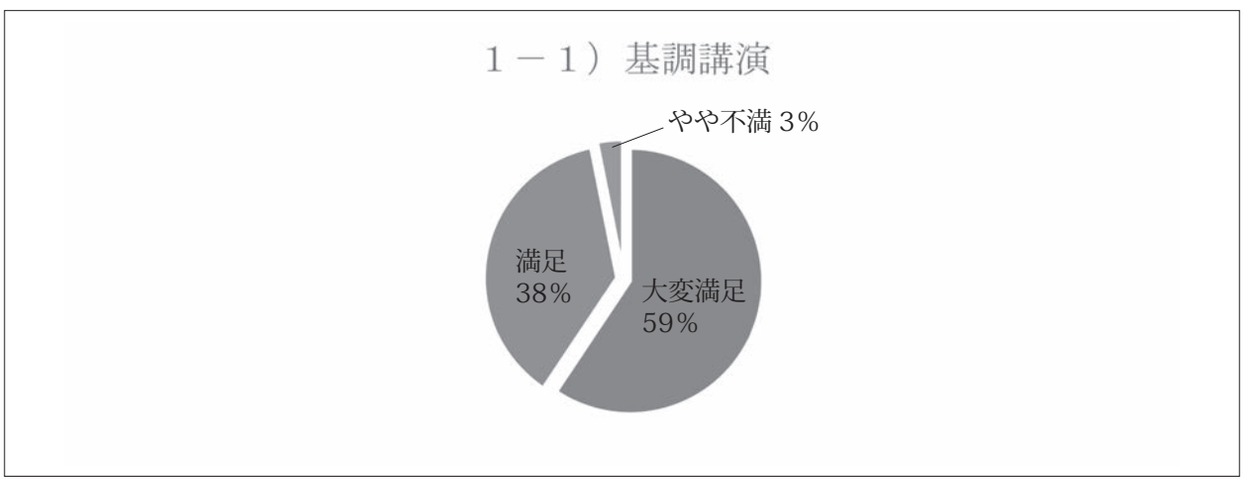
講演およびグループディスカッションアンケート結果

参加：31 校　44 名

アンケート回収数：32 名（回収率 72.7%）

Ⅰ．基調講演について

「大学・学部のリーダーの責務と役割、有効な大学組織作りに向けて」 小川　哲生先生




〈ご意見・ご感想〉

・私立大学の使命と経営面から知り得たことで、自らの仕事を客観視することができた。

・教育におけるリーダーが何をすべきかを明快に示された。

・自分自身のありかたをふりかえるための参考になった。

・海外と比較し、日本の状況がわかり、勉強になった。

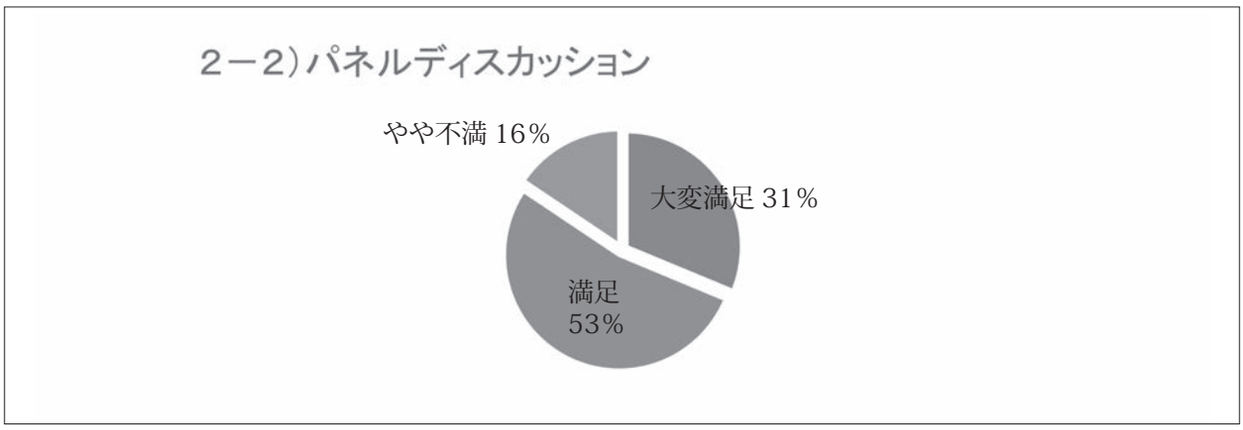
・大学法人が学生にとっては責務者であり、その職責を果たさなければならないという話は、単なる精神論ではなく説得力があった。

・日頃問題ではないかと考えていた事柄について、具体的に問題の核心に迫ることができた。解決策がみいだされた訳ではないが、取り組む一歩がわかった。

・大学教育の責務、役割、組織等に対して社会的側面、私大の特徴からご講演いただき理解を深めることができた。

Ⅱ．パネルディスカッションについて

「私が期待する看護学教育における管理者のリーダーシップ」




〈ご意見・ご感想〉

・自分自身のあり方をふりかえるための参考になった。次世代育成について考えていきたい。

・多様な視点を得ることができました。

・様々な立場からの話で、とても興味深く聞かせていただいた。

・各々違った観点から要点を整理して発表され、とてもわかりやすかった。

・領域責任者の立場、講師や助教の立場からの管理者に対する生の声も聞きたかった。

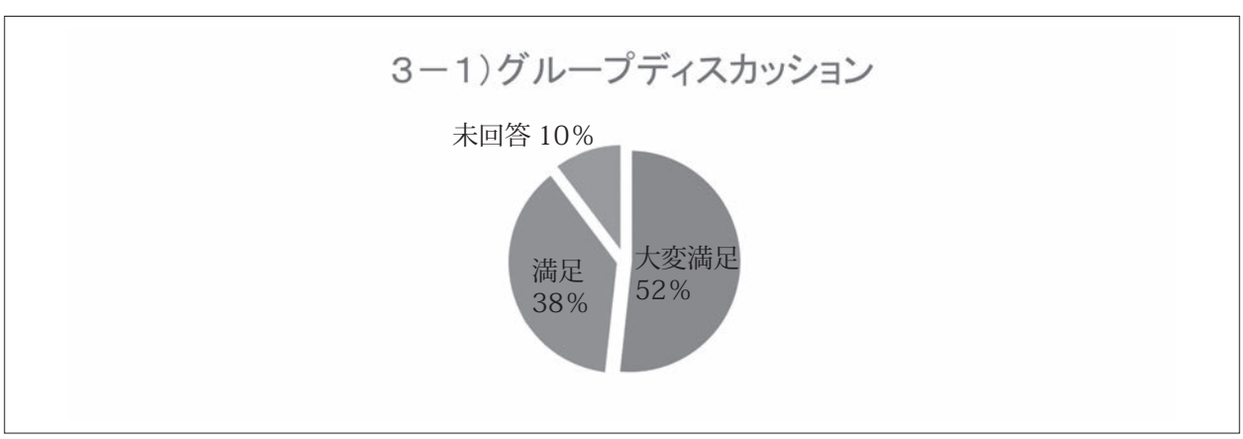
・各パネラーの発表は有意義だった。できればパネラー相互の意見交換があると良かった。

・看護教育が高度化され臨床経験が軽んじられていると感じる、そのために学生の臨地実習に深みが増さない、大学の教員には教育力としての教授歴を７割、研究力を３割として教員の昇格規準を考えている。

・全体のディスカッションの時間がもう少しほしかった。あまり議論にならなかった。

Ⅲ．グループディスカッションについて

「講演、パネルディスカッションをふまえて、問題提起や情報交換」

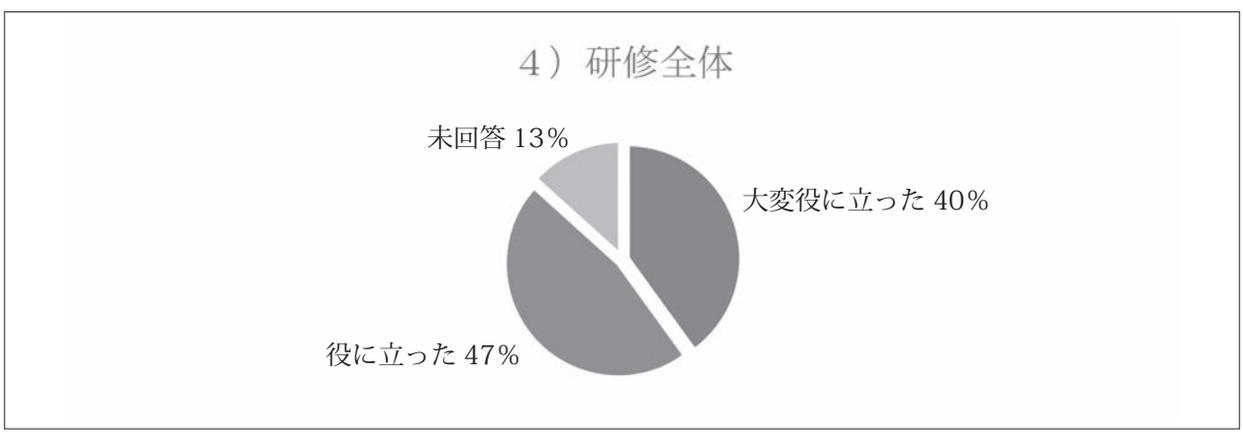



〈ご意見・ご感想〉

・共感しあい、具体性のある実践を教えて頂いた。前向きな行動化を後押しすることとなった。

・他大学の状況がわかり、課題を共有することができた。
・新設校の話や経験豊かな先生方の話がきけて勉強になった。
・若手教員のかかえる問題がわかった。
・意見が途切れることはなく、様々な方向から問題解決に向けた情報が出され、行動できると思える示唆を得ることができた。
・多くの体験・考え・意見を交換でき、有意義だった。
・他大学の教員事情を伺うことができ、対応に対するアイディアもいただけた。
・日頃かかえている課題が、自分だけでなく他大学も同様であることと、それぞれが解決に向けてどんな対策や工夫を試みているか知ることができ満足した。
・管理的立場を経験された方、新設校に着任されたばかりの方等、意見交換、情報交換が充分にできた。今後に生かせることがたくさんあった。

Ⅳ．研修全体について




〈ご意見・ご感想〉
・深い内容で、継続的に取り組んでいく内容と思った。
・変革期というけれど、何がどう変わろうとしているのか知りたいと思う。人口減少だけなのだろうか。
・それぞれ大変なのでネットワークを広げる機会となった。
・今後に生かせる内容がいくつかあった。
・他大学も同様の悩みや課題をかかえていることがわかった。少しでも解決に向けた方向性を見い出せるような意味ある話し合いができたと思う。
・講演を一方的に聞くのではなくグループワークができて、発表で共有もできて得るものが多かった。
・現在、リーダー役割を求められる立場ではないが、リーダーを支える立場として得るものが多くあった。
・他大学の教育上の課題なども知ることができた。
・私大に共通している課題、自己の課題について考えることができた。

Ⅴ．今後の企画について（開催方法、開催時期、場所など）

・事務方との共同研修、8 月。

・新人は勿論、様々なキャリアの教員の教育をワークショップ、GW を取り入れながら。

・中堅教員の能力、意識の差が非常に大きいと感じる。この点に焦点をあてた研修。

・リーダーシップ研修は今後も続けてほしい。

・今の学生をどう育てるか、「学力、生活力の低い、学び方を学んでいない等」。

・大学院の論文審査を通して、修士論文、博士論文の質を担保にする方法について。（山ほどできた大学院は、本当に国際的に通用するレベルの学位を出せているのか？）

・地方から上京するものにとっての利便性を考えて頂きたい。（場所）日曜日に遅い時間は翌勤務に支障をきたすこともあり、避けて頂きたい。

・テーマ「効果的な FD について」

・教員の資質向上のためにも FD を計画にいただけると有り難いです。変革期における私立看護系大学の生き残りについてのセミナーなど…。

・他大学と情報交換できる為、教員をエンパワメントする内容を具体的に挙げられないか。

## ２．大学における研究に関する事業

①学術研究および学術研究体制に関する事業

②研究助成事業

### 趣旨

①教員による研究費獲得の向上、学術研究の大学内環境や条件を向上するための方策の調査研究

②研究助成と研究ネットワークづくり

③研究に関するセミナー、研修会等の実施

④上記①～③に関する本法人の提言または要望案のとりまとめと理事会及び総会への報告

### 代表者および委員会構成員（◎：代表者　○：担当理事）

◎塚本　康子（新潟医療福祉大学）

○出野　慶子（東邦大学）

○前山　直美（神奈川歯科大学短期大学部）

○奥田　泰子（四国大学）

松永　佳子、坂本なほ子、天野　里奈、高井　　怜（東邦大学）

研究助成選考委員会委員

松下由美子（佐久大学）、梅田　麻希、森　　明子（聖路加国際大学）、泉　キヨ子（帝京科学大学）、林　みよ子（天理医療大学）、井上ひとみ（獨協医科大学）、吉田みつ子（日本赤十字看護大学）、森崎　直子（姫路大学）

### 活動経過

【学術研究および学術研究体制に関する事業】

学術研究に関する講演会開催に向けて講師・講演内容の検討、リーフレット案の作成、「研究セミナー」広報について検討、申し込み方法は Web。

平成 28 年 9 月 17 日（土）『研究セミナー』開催場所：東邦大学看護学部

第 1 部　平成 24・25 年度若手研究者研究助成成果報告会

1．看護師が獲得している Employability の内容と影響要因　　福井　純子（北海道医療大学）

2．目盛り付きゴム管駆血帯の有用性についての検討
—既存の留め金付きゴム管駆血帯との比較—　　佐々木新介（関西福祉大学）

3．24 時間対応の訪問看護ステーションにおける ICT（Information Communication Technology）を用いた在宅支援に関する基礎的研究　　横山　浩誉（大阪医科大学）

4．副作用による化学療法の休薬を経験した進行再発大腸がん患者のレジリエンスの様相
鈴木　香苗（日本赤十字広島看護大学）

5．月経前症候群（PMS）/ 月経前不快気分障害（PMDD）の重症度評価による女性労働者のメンタルヘルス不全予防プログラム開発のための基礎的研究　　濵西　誠司（関西福祉大学）

6．幼児期に小児がんを経験した子どもの学校生活適応への親の関わりと看護支援の検討

山地　亜希（大阪医科大学）

なお、1席目の小坂志保（上智大学）は欠席、次年度の発表となる。

第2部　看護研究の目的別アプローチ

Ⅰ「研究における統計解析のキーポイント」　高木　廣文（共立女子大学）

Ⅱ「看護研究における統計解析」　八重ゆかり（聖路加国際大学）

参加者：109名、セミナー評価は後述資料

【研究費助成事業】

平成28年度の看護学研究奨励賞、若手研究者研究助成、国際学会発表助成の募集を行い、7月に選考委員会で選考した結果を理事会に提出、書類審査の上、助成者を決定し、助成金の交付とともに、「研究セミナー」で研究助成の募集および選考結果の報告をした。

【大学における研究に関する事業担当者会議の開催】

第1回　平成28年4月30日（土）　13：00～　アルカディア市ヶ谷

出席者：佐々木秀美、塚本　康子、出野　慶子、前山　直美

議　事：

1．平成28年度活動計画案策定

研究セミナー開催日を9月17日に変更、場所が東邦大学となった旨を修正。

2．平成28年度予算案策定

研究セミナー開催場所の変更による予算案を修正。

3．研究セミナー

テーマは「看護研究の目的別アプローチ」

研究成果報告会では発表10分、質疑3～5分。

運営委員は東邦大学から3名、神奈川歯科大学短期大学部から3名、新潟医療福祉大学から3名。

リーフレットは7月の総会で配布できるよう準備、大判のポスターは作成しないこととした。

4．委員会体制

平成28年度の責任者は塚本、研究セミナー主担当は出野、研究助成主担当は前山。

第2回　平成28年5月28日（土）　10：30～　アルカディア市ヶ谷

出席者：佐々木秀美、塚本　康子、出野　慶子　　欠席：前山　直美

議　事：

1．平成27年度事業活動報告・会計について

2．平成28年度事業活動計画について

1）研究助成選考委員候補を確認、理事会にて審議する予定。

2）各大学の研究体制について「大学運営・経営に関する事業」の調査データを用いて分析

する。

3.「研究セミナー」について

スケジュール、リーフレット、ポスター、研究成果報告者、講演会講師について最終確認。

4．研究助成事業について

1）看護学研究奨励賞、若手研究者研究助成、国際学会発表助成の公募状況の確認。

2）選考委員のメンバー確認を行い、7月17日に選考会議を実施することとした。

第3回　平成28年7月17日（日）　11：00～14：00　日本私立看護系大学協会事務局
出席者：塚本　康子、出野　慶子、選考委員
議　事：平成28年度研究助成の選考について
看護学研究奨励賞　応募者2件、採択0件
若手研究者研究助成　応募者18件、採択10件
国際学会発表助成　応募者9件、採択4件

第4回　平成28年7月23日（土）　13：00～　TKP市ヶ谷カンファレンスセンター
出席者：塚本　康子、出野　慶子、前山　直美
議　事：

1．研究セミナーについて

1）研究助成事業研究成果報告会依頼文の検討

2）プログラムの確認

3）座長や会場内係の交通費など予算について

4）9月17日役割の確認

2．研究助成事業選考委員会の結果報告

第5回　平成28年11月25日（金）　10：30～11：45　アルカディア市ヶ谷
出席者：塚本　康子、出野　慶子、前山　直美、奥田　泰子
議　事：

1．研究セミナーについて

2．次年度に向けての検討事項

3．次年度以降の理事の担当事業について

第6回　平成29年2月27日（金）　13：00～15：00　日本私立看護系大学協会事務局
出席者：塚本　康子、出野　慶子、前山　直美
議　事：

1．平成28年度事業活動報告書と予算執行について

2．平成29年度事業活動計画書と予算案について

3．助成事業細則および研究助成募集要項の検討

4．研究助成事業に関する検討

**今後の課題**

・会員校の研究費獲得の向上につながる具体的方策、および研究体制向上のための方策を検討し、講演会・研究会などを行い、それぞれの成果を評価する。

・会員校の研究活動活性化に資する研究助成事業のあり方や適切性、審査方法について検討していく。

## 日本私立看護系大学協会　研究セミナーアンケート　集計結果

**【開催概要】**

日時：2016 年 9 月 17 日（土）

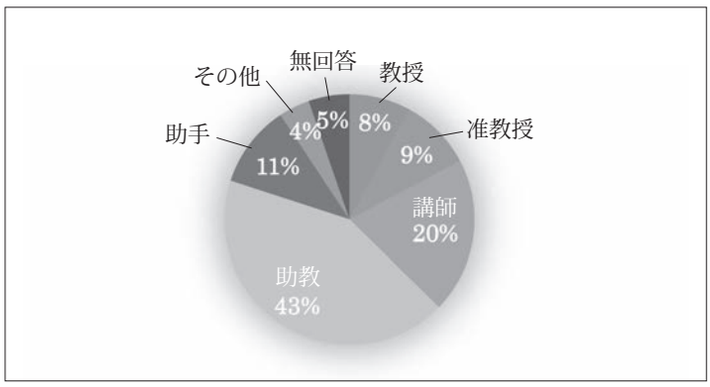
場所：東邦大学看護学部　第 1・2 講義室

**【参加者・アンケート回収（回収率）】**

参加者 109 名・アンケート配布数：85 名・アンケート回収：75 名（回収率 88.2%）

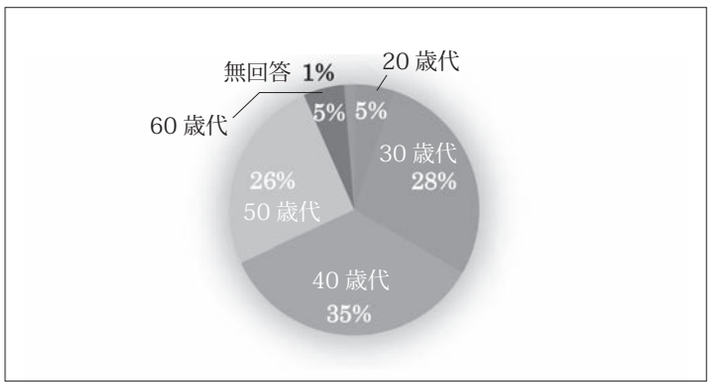
1．職位

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| 教授 | 6 | 8.0 |
| 准教授 | 7 | 9.3 |
| 講師 | 15 | 20.0 |
| 助教 | 32 | 42.7 |
| 助手 | 8 | 10.7 |
| その他 | 3 | 4.0 |
| 無回答 | 4 | 5.3 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



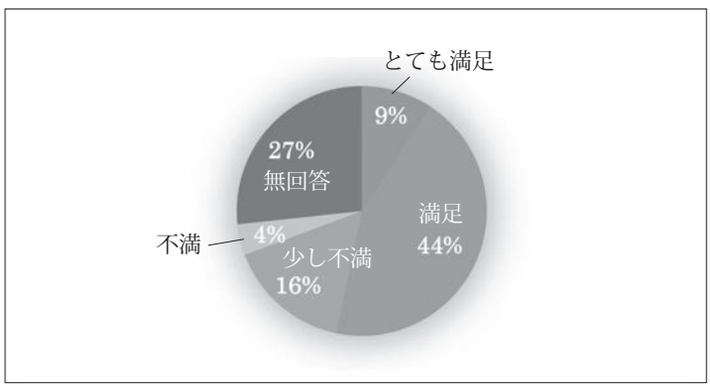

2．年代

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| 20 歳代 | 4 | 5.3 |
| 30 歳代 | 21 | 28.0 |
| 40 歳代 | 26 | 34.7 |
| 50 歳代 | 19 | 25.3 |
| 60 歳代 | 4 | 5.3 |
| 無回答 | 1 | 1.3 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



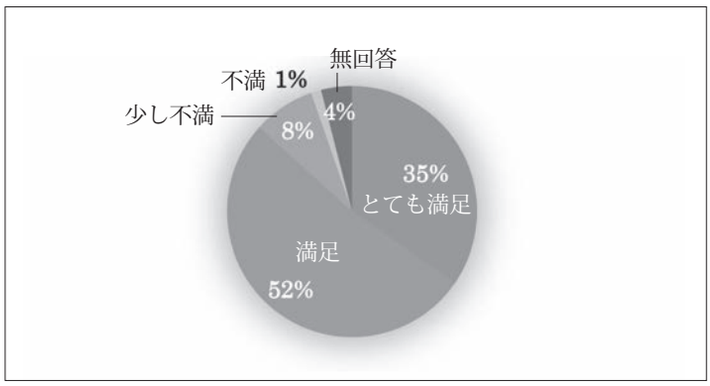

3．プログラム第 1 部　研究成果報告

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 7 | 9.3 |
| 満足 | 33 | 44.0 |
| 少し不満 | 12 | 16.0 |
| 不満 | 3 | 4.0 |
| 無回答 | 20 | 26.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



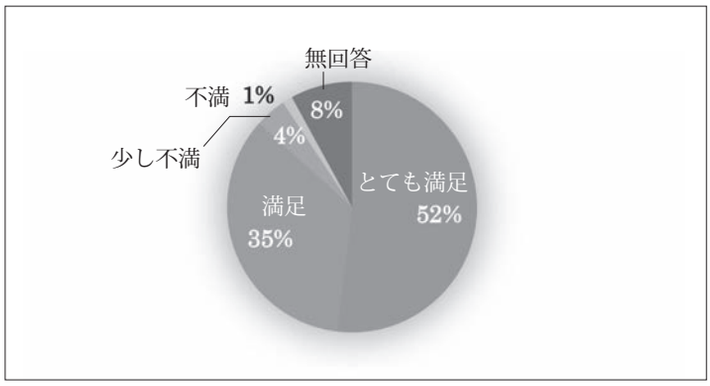
4．プログラム第２部　前半

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 26 | 34.7 |
| 満足 | 39 | 52.0 |
| 少し不満 | 6 | 8.0 |
| 不満 | 1 | 1.3 |
| 無回答 | 3 | 4.0 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



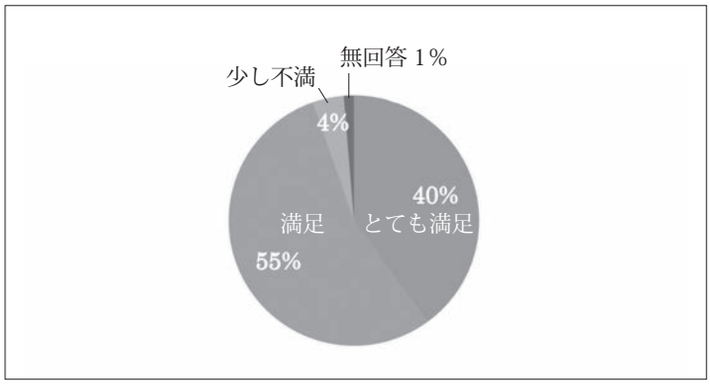

5．プログラム第２部　後半

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 39 | 52.0 |
| 満足 | 26 | 34.7 |
| 少し不満 | 3 | 4.0 |
| 不満 | 1 | 1.3 |
| 無回答 | 6 | 8.0 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



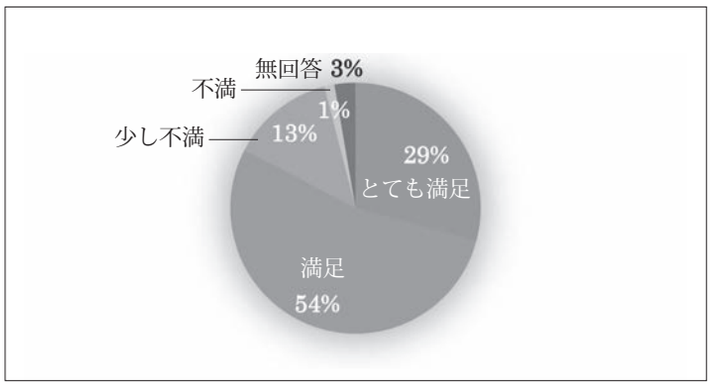

6．事前準備（登録方法）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 30 | 40.0 |
| 満足 | 41 | 54.7 |
| 少し不満 | 3 | 4.0 |
| 無回答 | 1 | 1.3 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



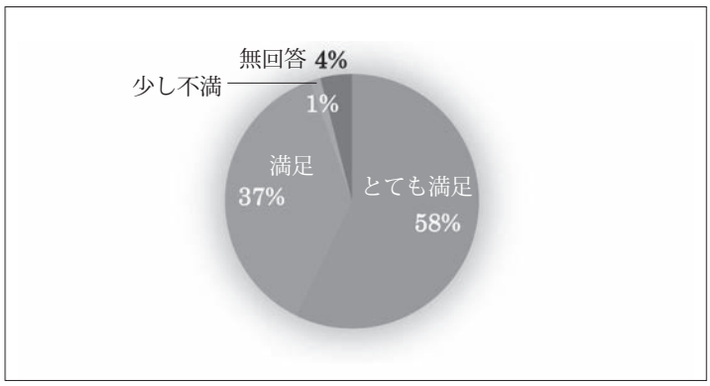

7．事前情報（事前準備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 22 | 29.3 |
| 満足 | 40 | 53.3 |
| 少し不満 | 10 | 13.3 |
| 不満 | 1 | 1.3 |
| 無回答 | 2 | 2.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



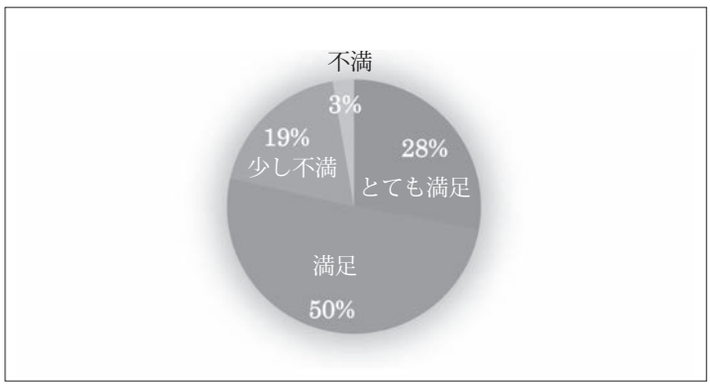
8．事前情報（配布資料）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 43 | 57.3 |
| 満足 | 28 | 37.3 |
| 少し不満 | 1 | 1.3 |
| 無回答 | 3 | 4.0 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



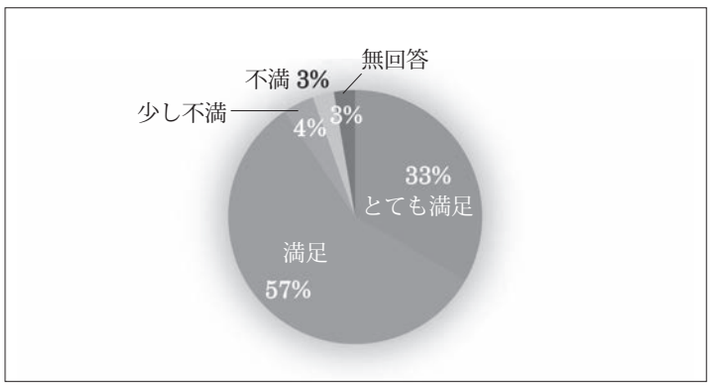

9．会場（会場設備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 21 | 28.0 |
| 満足 | 38 | 50.7 |
| 少し不満 | 14 | 18.7 |
| 不満 | 2 | 2.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



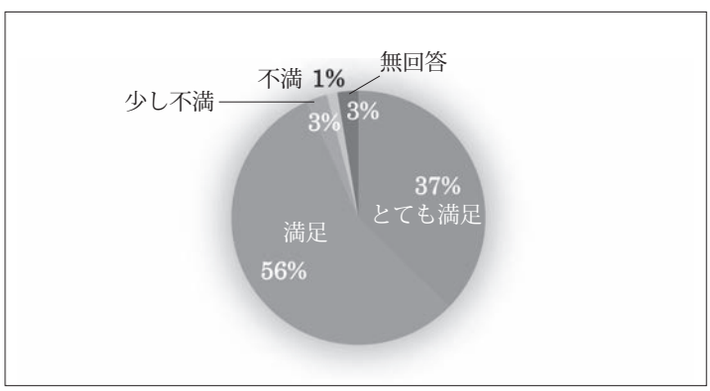

10．映像（会場設備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 25 | 33.3 |
| 満足 | 43 | 57.3 |
| 少し不満 | 3 | 4.0 |
| 不満 | 2 | 2.7 |
| 無回答 | 2 | 2.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



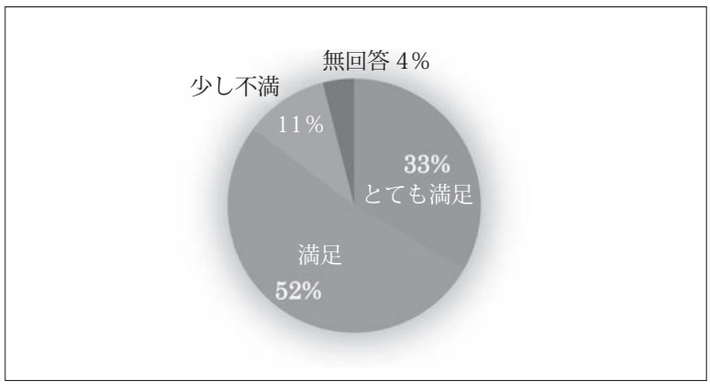

11．音響（会場設備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 28 | 37.3 |
| 満足 | 42 | 56.0 |
| 少し不満 | 2 | 2.7 |
| 不満 | 1 | 1.3 |
| 無回答 | 2 | 2.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



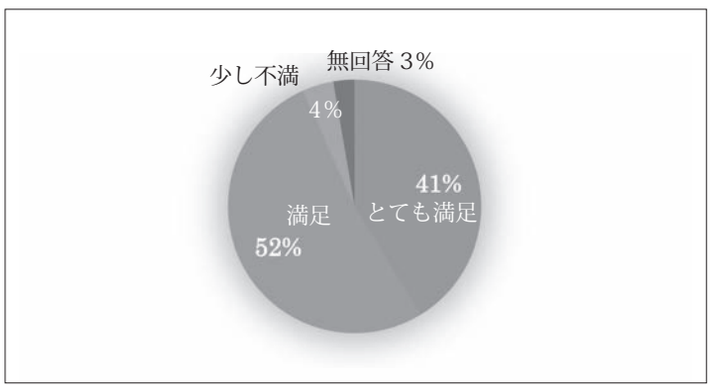
12. レイアウト（会場設備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 25 | 33.3 |
| 満足 | 39 | 52.0 |
| 少し不満 | 8 | 10.7 |
| 無回答 | 3 | 4.0 |
| 合計 | 75 | 100.0 |



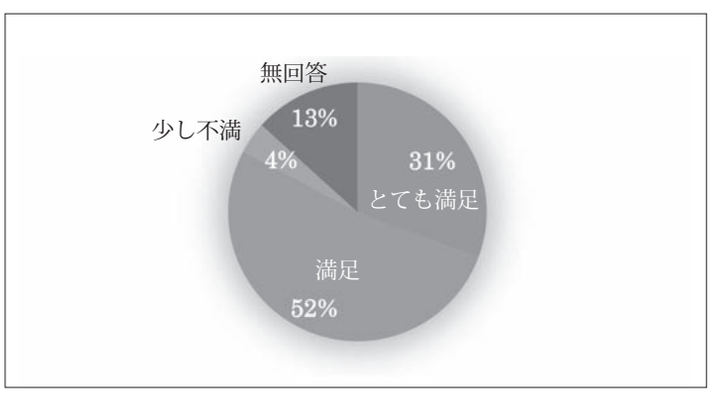

13. テーマの提示（会場設備）

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 31 | 41.3 |
| 満足 | 39 | 52.0 |
| 少し不満 | 3 | 4.0 |
| 無回答 | 2 | 2.7 |
| 合計 | 75 | 100.0 |




14. 全体

| | 人数 | % |
|---|---|---|
| とても満足 | 23 | 30.7 |
| 満足 | 39 | 52.0 |
| 少し不満 | 3 | 4.0 |
| 無回答 | 10 | 13.3 |
| 合計 | 75 | 100.0 |




**【アンケート自由記述】**（抜粋）

1．研究成果報告会・研究助成について

・研究成果報告は課題が多い内容だったと思います。助成対象者はどのような基準で選択されているのか疑問に思いました。助成なのでもう少し、研究デザインや研究目的などきちんと整ったものを採択してほしいと思いました。

・若手の助成の方々の発表では出来るだけ成長につながる方向に持っていきたいところであるが、ある成果を得るためには研究過程の間でどのようにすればよいか考えさせられた（例：目的と研究タイトルの相違は最も重要な視点）

・報告会の質疑応答の時間の先生方のコメントや助言が大変勉強になりました。

・研究成果報告での井部先生のコメント、髙木先生、八重先生の講演などにより、改めて研究計画をきちんと立案する重要性を学びました。

・若手研究者の条件を研究者になり５年以内とかにしてほしい。年齢を重ねてから研究者になる人も少なくないため、その人にも機会をあたえてほしい。
・研究助成金のこともあまりよく知らなかったので、また大学にもどって調べてみたいです。

２．講演について
・八重先生の話は具体的に論文を用いた説明があったのでとても分かりやすかった。次に機会があればもっと聞きたいと思いました。
・統計にはとても興味があるのですが、できればもう少し実践的な内容だと助かります。例えばパソコンで実際に仮のデータを持ちだしながらするなど。八重先生のお話はもっと聞きたいと思いました。
・午後からのセミナーを聞かせていただいて、自分の研究に活用出来る学習がたくさんできました。統計についてもっと学びたいと思いました。研究倫理のことの学習もしていきたいです。はじめて参加させて頂きましたがとてもよい研修だと感じました。
・Mixed Methods や介入研究に関すること。実際の論文から説明され、非常に分かりやすかったです。
・大学院在学中は研究について指導を受ける機会がありましたが、修了後はなかなか相談・指導を受けることが出来ず、研究に取り組むことができずにいました。今日は研究計画の段階で、方向性を明らかにすることの大切さを再確認することができました。
・具体的な内容で今後に役立てられるものでした。
・自己研鑽のため参加してよかった。
・充実したプログラムでした。思ったよりもずっといい。運営ありがとうございました。
・お手本となる論文を沢山頂けてよかったです。
・午後の部から参加しました。私には難しい内容でした。基本的なことから、しっかり学習して出直したいと思いました。
・八重先生のていねいな心あたたまるご講義に勇気づけられました。
・今後活用していけるような学びを得ました。
・勉強になりました。特に八重先生の講義がとてもわかりやすく、ためになりました。
・講義は大変有意義でした。
・座長の先生とてもよかったです。講演を盛り上げたと思います。

３．今後の研究セミナーについて
・今後もシリーズ化して統計手法に関するセミナーが行われるといいです。質研究の分析も関心があります。
・統計解析について、今回のテーマと重複しても良いので、もう少し学びたい。
・新任教員向けの統計に関する基礎講習を希望します。
・統計学を具体的に示して講義してもらいたい。
・「質的研究のデータ分析について」「混合研究法」などが今後参加したいセミナー内容です。
・質的看護研究のセミナーがあれば。

・質的研究のポイントについても、ぜひ聞いてみたいです。
・英語論文の書き方など。

## 平成 28 年度　日本私立看護系大学協会研究助成事業

看護学研究奨励賞、若手研究者研究助成及び国際学会発表助成選考結果について

Ⅰ．看護学研究奨励賞：2 件の応募があり、審査の結果該当者なしとなった。

Ⅱ．若手研究者研究助成：18 件の応募があり、審査の結果以下の 10 件を採択した。

| 氏名 | 所属 | 研究テーマ |
|---|---|---|
| 西村　礼子 | 東京医科大学 | ICT を活用した教育が看護師の眼球運動と脳血流へ与える影響 |
| 鈴木みゆき | 兵庫医療大学 | 女性看護師の冷えと就労環境・生活環境との関連について |
| 高谷　知史 | 兵庫医療大学 | 慢性疾患患者・児がいる家族を支援する看護師の家族コンコーダンス形成力の概念構築 |
| 徳永　智美 | 四条畷学園大学 | 新生児蘇生の実践力を維持する再履修教育構築のための基礎的研究 |
| 金坂伊須萌 | 東邦大学 | 爪装飾による手指細菌汚染の実態と病院感染伝播防止に関する研究 |
| 高井　　怜 | 東邦大学 | 脳卒中患者に対する包括的リハビリテーション旅行プログラムの評価指標の開発 |
| 種本　純一 | 日本赤十字北海道看護大学 | プリセプター看護師の役割遂行状況に及ぼす影響要因 |
| 大塚　寛子 | 日本赤十字看護大学 | 親向けの乳幼児予防接種教育プログラムの普及のためのガイドラインの開発 |
| 今野　和穂 | 帝京平成大学 | 新生児を育てる母親のストレス |
| 金盛　琢也 | 聖路加国際大学 | 下肢人工関節置換術後の高齢者の退院後早期の転倒を予防する包括的転倒予防プログラムの開発と評価 |

Ⅲ．国際学会発表助成：9 件の応募があり、審査の結果以下の 4 件を採択した。

| 氏名 | 所属 | 研究テーマ | 学会名・開催地 |
|---|---|---|---|
| 鈴井江三子 | 兵庫医療大学 | Effects of education about the detection of early signs of child abuse on after-school child-care workers | Optimizing Healthcare Quality 国際学会<br>タイ・チェンマイ |
| 亀田　直子 | 摂南大学 | TO FIND AN INTENTIONAL MINUTE REACTION IN A 10-YEARS OLD CHILD WITH A SEVERE BRAIN INJURY CAUSED BY CEREBRAL HYPOXIA AFTER CARDIOPULMONARY ARREST | 28th　International Congress of Pediatrics<br>カナダ・バンクーバー |

| 氏名 | 所属 | 研究テーマ | 学会名・開催地 |
| --- | --- | --- | --- |
| 山本　由子 | 武蔵野大学 | Use of life Reviews to Improve Elderly Dementia Patient Communications | 14th International Conference on Communication in Healthcare<br>ドイツ・ハイデルベルグ市 |
| 徳重あつ子 | 武庫川女子大学 | Basic Research of Reminiscence Therapy in Nursing Measured by Near Infrared Spectroscopy (NIRS) | Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 27th International nursing Research Congress<br>南アフリカ共和国　ケープタウン |

## ３．教育、学術および文化の国際交流事業

### 趣旨

①看護における教育、学術および文化の国際交流を通して、将来国際的に関連機関との連携、協力及び援助に繋がるための方策の調査研究

②看護界の動静と看護学教育の国際交流の現状と将来についての講演会等の実施

③上記①、②に関連する本法人の提言または要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告

### 代表者および委員会構成員（◎：代表者　○：担当理事）

◎伊藤　直子（西南女学院大学）

○小山眞理子（日本赤十字広島看護大学）

田村　由美（日本赤十字看護大学）、藤井　知美（日本赤十字広島看護大学）、布花原明子、鹿毛美香（西南女学院大学）

### 活動経過

本事業活動は、看護における教育、学術および文化の国際交流を通して、将来国際的に関連機関との連携、協力および援助に繋がるための方策の調査研究、看護界の動静と看護学教育の国際交流の現状と将来についての講演会等の実施および関連する本法人の提言又は要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告を行うものである。今年度の活動計画は、実態調査であった。メール会議などで連絡調整を図りながら、現在までの活動を計画実施している。以下に活動内容について報告する。

１）　グローバル化に対応する教育内容実態調査

（1）　全加盟大学におけるグローバル人材の育成に関する教育の実態調査（web 調査）

①回答数　117 校（回答率 68.8％）

②調査結果概要

・項目Ⅰ．グローバル人材育成に関する大学の計画・方針、制度について

中長期計画等にグローバル人材育成に係る事項が記載されている大学が 51.4％である。大学類型別にみると、単科大学が 40.7％、複合大学が 47.4％、総合大学が 61.4％記載されている。グローバル人材育成について教育指針（ポリシー等）に策定している大学が 43.1％、今後、策定予定である大学が 22.0％である。グローバル人材育成を促進するための専門部署を置いている大学が 18.3％である。

・項目Ⅱ．語学力・コミュニケーション力の養成について

英語（外国語）の授業にグループワークを取り入れることを組織的に方向づけている大学が 48.6％、英語（外国語）のすべての授業が習熟度別に編成されている大学が 17.4％である。学生がアカディミックライティングに関する指導を受ける環境がある大学が 37.6％であり、グループワークや討論等、プレゼンテーション能力やディベート力の修得を目的とした取り組みを行って

いる大学は 58.7％である。

外国の大学との単位互換を導入・導入予定の大学が 10.1％、ダブル・ディグリー・プログラムを導入している大学が導入予定・検討中を含め 4.6％である。GPA 制度を導入している大学が 87.2％であり、主に奨学金や授業料免除の基準や学生に対する個別学修の基準として活用されており、交換留学等の選抜基準の活用は少数の大学である。

・項目Ⅲ．異文化に対する理解やアイデンティティーを涵養するための取り組みについて

一般教養科目として異文化理解や異文化コミュニケーションをテーマとする授業が必修の大学が 17.4％、選択である大学が 58.7％である。専門科目として、国際社会と関連付けた内容を教授する科目が複数科目ある大学が 33.0％、1 科目の大学が 49.5％である。外国人留学生と日本人学生が協働で課題を解決するような授業がある大学が 11.9％、討論する等、伝える力やディベート力の修得を目的とした授業がある大学が 13.8％である。海外からの留学生の受入れや海外への学生派遣の促進を導入している大学が 19.3％である。

・項目Ⅳ．主体性、チャレンジ精神、協調性、責任感を涵養するための取り組みについて

1 年時から演習（ゼミ）方式の授業が行われている大学が 77.1％である。大学が組織的に進めている内容として、教員と学生との質疑応答が積極的になされる仕組み 50.4％、学生同士のディスカッションが積極的になされる仕組み 54.2％、学生におる課題解決型学習 26.6％、授業の中でコンテストや大会等を実施し、競争環境を作る仕組み 15.6％がある。学生のボランティア活動や地域活動への参画を促進するための制度・取組がある大学が国内活動 58.0％、海外活動 15.6％である。

(2)　抽出校のヒアリング調査

本年度は、実態調査（web 調査）の実施・分析期間に変更、ヒアリング調査の準備期間とし、来年度以降の調査に向けて調整を行うこととする。

2）　委員会活動

| | 日時 | 方法 | 場所 | 検討事項 |
|---|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 2016 年<br>8 月 30 日（火）<br>～ 9 月 7 日（木） | メール会議 | 各大学 | ・平成 28 年度事業活動計画の分担について |
| 第 2 回 | 9 月 28 日（水）<br>～ 12 月 7 日（水） | メール会議 | 各大学 | ・実態調査（web 調査）内容について |
| 第 3 回 | 12 月 20 日（火）<br>～ 12 月 28 日（火） | メール会議 | 各大学 | ・実態調査の今後のスケジュールについて<br>・実態調査の案内文書について<br>・実態調査のデータ納入方法や回収催促の方法について<br>・その他 |

| | 日時 | 方法 | 場所 | 検討事項 |
|---|---|---|---|---|
| 第 4 回 | 2017 年<br>1 月 20 日（金）<br>～1 月 27 日（金） | メール会議 | 各大学 | ・実態調査の動作確認について |
| 第 5 回 | 3 月 13 日（月）<br>～3 月 31 日（金） | メール会議 | 各大学 | ・実態調査の動作確認について |

## 今後の課題

平成 28 年度は、看護教育におけるグローバル人材育成について、さらに議論を進めるために、各大学が取り組んでいる教育目標および教育課程の編成、学生に対する教育、教育を提供する体制等、教育の現状と課題を明らかにし、本協会における教育、学術および文化の国際交流事業の基礎資料とするため、実態調査を実施した。

平成 29 年度は私立看護系大学における看護教育のあり方について、実態調査の分析を深め、加えて国際交流活動を活発に行っている私立看護系大学に対して、組織のあり方、人的・経済的資源の活用方法、看護学教育カリキュラムでの位置づけ・教育内容・方法等についてヒアリング調査を行い。提言するための資料を作成する。

## ４．大学運営・経営に関する事業

**趣旨**

①私立看護系大学の振興に必要な国、地方公共団体または民間からの補助金、寄付金、その他の支援が可能になるような実態調査・分析

②大学運営・経営の向上に繋がる事業を展開するための方策の調査研究

③上記に関連する本法人の提言又は要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告

**代表者および委員会構成員**（◎：代表者　○：担当理事）

◎林　　優子（大阪医科大学）

○長澤　正志（淑徳大学）

髙木　廣文（共立女子大学）、渡辺　明良（聖路加国際大学）、藤川優美子（岩手看護短期大学）、出坂　秀雄、星加　圭子（大阪医科大学）

**活動経過**

1）　大学運営・経営委員会開催（3 回開催）

【第 1 回】

日　時：平成 28 年 6 月 12 日（日）　13 時～ 15 時

場　所：日本私立看護系大学協会事務局（千代田ビル 405 号室）

出席者：林　　優子、長澤　正志、高木　廣文、渡辺　明良、藤川優美子、出坂　秀雄、星加　圭子

議　題：

（1）　Web 登録＆入力・解析システムのシステム仕様について

（2）　研修会開催について

【第 2 回】

日　時：平成 28 年 10 月 15 日（土）　15 時～ 17 時

場　所：聖路加国際大学　大村進・美枝子記念 聖路加臨床学術センター会議室

出席者：長澤　正志、高木　廣文、渡辺　明良、藤川優美子、出坂　秀雄、星加　圭子

欠席者：林　　優子

議　題：

（1）分析結果の資料に基づいた解析、仕様について

（2）事業計画について

【第 3 回】

日　時：平成 29 年 2 月 25 日（土）　13 時～ 15 時

場　所：日本私立看護系大学協会事務局（近清堂ビル 6 階）

出席者：林　　優子、長澤　正志、高木　廣文、渡辺　明良、藤川優美子、出坂　秀雄、星加　圭子

議　題：

(1)　看護教育研究経費の調査結果について
(2)　事業活動計画について

2)　看護教育研究経費（ウエブ登録・EDC システム）の調査開始
(1) Web 登録＆入力開始（平成 28 年 9 月 7 日付）文書で日本私立看護系大学協会より加盟校へ依頼
(2) 未回答または回答中（一時保存中）である加盟校の窓口担当者へ協会よりメールで督促（10 月 17 日）
(3) 解析システムの各大学への公開

3)　教職員を対象とした研修会開催
日　時：平成 28 年 10 月 15 日（土）　13 時～ 15 時
場　所：聖路加国際大学大村進・美枝子記念 聖路加臨床学術センター
テーマ：私立大学等改革総合支援事業採択に向けての対策と会計検査院対応
講　師：日本私立学校振興・共済事業団 助成部 補助金課長　菊池　裕明 氏
参加者：39 名

**今後の課題**
(1)「看護教育研究経費」の結果について、会員校が解析をしやすいような統計処理の充実を図る。
(2) 教職員を対象とした研修会の充実を図り、私学行政（私立看護系大学）に関する問題や戦略について情報交換を行う。

## 5．関係機関との連携・協力等に関する社会的事業

### 趣旨

①本法人の発展のため外部の組織に働きかけ、看護教育並びに看護専門職としての充実・発展に必要な国の制度や法令、文教行政や予算、高大連携についての確かな情報収集と分析・整理

②文部科学省、厚生労働省関係、日本学術会議をはじめ、日本私立大学協会、日本私立学校振興・共済事業団、中央教育審議会、大学設置・学校法人審議会等諸機関の活動状況の把握をし、必要な提携・協力および支援活動を企画・実施

③国家試験問題に関する公募状況調査、啓発活動のためのセミナーの実施

④上記①～③に関連する本法人の提言又は要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告

### 代表者および委員会構成員（◎：代表者　○：担当理事）

◎大西香代子（園田学園女子大学）

○山本眞千子（茨城キリスト教大学）

○清水　房枝（京都光華女子大学）

栗原加代子（茨城キリスト教大学）、山本　恭子、新井香奈子（園田学園女子大学）、山下　舞琴（京都光華女子大学）

### 活動経過

本委員会は、「協会外部の組織に働きかけ、制度や法令、文教政策等の確かな情報収集と分析、文部科学省・厚生労働省を中心とした諸機関との必要な提携、さらには国家試験に関する調査や啓蒙活動等の企画・実践する」という趣旨の下、時々の課題に応じた活動を行ってきた。平成23年度より、国家試験の基本的なあり方について検討を重ね、一昨年度および昨年度は、「看護専門職としてのコアコンピテンシー」に相応した国家試験内容や水準等に関する検討の手がかりを得るために、「教育評価」の観点を取り入れた研修を企画・実施した。

今年度も、この方針を引き継ぎ、国家試験に関する研修を行った。また、もう一つの活動計画であった国家試験対策などの実態とニーズに関する加盟校調査については、本委員会の目的を検討しなおす中で、実施しないことを決定、次年度に向けて、本来の活動である関係諸機関との連携を探っていくこととなった。

1）　研修会「看護師国家試験を考える」

今年度は、国家試験について改めて考えてみるために「看護師国家試験を考える」として2部構成の研修会を、平成28年10月23日に東京ガーデンパレスにて実施した。日曜の開催であったが、109名が参加した。

第1部は、厚生労働省医政局看護課課長補佐の猿渡　央子氏による「看護師国家試験の現状と課題」で、合格者・合格率の推移など看護師国家試験の概要、非選択敷式計算問題の導入や視覚素材の公募などの改善策のほか、来年から「長い状況文を伏した単問の状況設定問題を導入」することが話された。また、視覚素材だけでもいいので試験問題への公募に協力してほしいとの依

頼もあった。講演後の質疑応答では、受験に備えて宿泊施設を確保する必要があるので、試験月日や試験会場をもっと早く公表してほしいなどの意見が出された。

第2部は、札幌医科大学の今野美紀教授による「看護師国家試験の『対策』～札幌医科大学の事例報告～」であった。いわゆる「国家試験対策」は何も行っていないにもかかわらず、毎年100％の合格を達成している背景には、「自校の教育をしっかり整えること」こそ国家試験対策になるとの信念があるようだった。教育の特徴として、1年の基礎看護学から、看護専任教員の指導のもと、事前学習課題及び事後学習課題を課し、自ら学ぶ姿勢を育てていること、学生の長所を認めつつ、さらによくするためのアドバイスを加えていくこと、看護過程の演習ではよくできている学生にプレゼンテーションさせ、学生同士での気づきを大切にしていることなどが話された。学生達も、自分の代で100％を途切れさせるわけにはいかない、とのプレッシャーを感じて勉強しているとのことであった。

今回の研修会についてのアンケートでは、満足度（満足・やや満足）がそれぞれ77％、68％と従来の結果に比べ、やや低い数字だった。第1部の講演に対しては、「今後の方向性がわかってよかった」という意見があった一方で、「概ね知っている内容だった」との不満も寄せられた。また、質問に対しても、回答してよいかどうかを持ち帰って検討すると保留になったものもあり、後日回答をホームページに掲載した。第2部については、「看護教育のあるべき姿を教えてもらった」、「学習環境を整えていくことの大切さがわかった」との意見と、「基礎学力が異なる」、「恵まれた環境」で「参考にならない」との不満の声や「ダメ私学の合格100％への道を聞きたい」との意見もあった。確かに、公立は恵まれた条件にあるのだろうが、学生自身が自ら学ぶ姿勢を持たなければ教育効果は上がらないし、国家試験はその結果としてついてくる、という基本を振り返る機会となる講演であった。

2）　委員会開催

今年度は、研修会準備も含め、6回の委員会を実施した。

（1）5月28日（土）

今年度の活動方針の確認、研修会の準備（講師、日時、会場等の検討）

（2）9月11日（日）

研修会会場（東京ガーデンパレス）下見、研修会運営に関する打合せ、調査の方向性の確認

（3）10月23日（日）（研修会終了後）

研修会総括、研修会のアンケートの集計について担当者検討

（4）11月25日（金）

加盟校調査に関する検討

（5）12月21日（水）

11月の理事会にて、1月実施予定の加盟校調査に待ったがかかったため、渉外委員会の活動の方向性について検討

（6）3月12日（日）

今後の活動方針について委員会案決定

## 今後の課題

ここ数年来渉外委員会で取り組んできた国家試験に関わる活動を元に、今年度初めに当委員会の中・長期活動方針を決定した。しかし、国家試験に関する会員校の実態とニーズに関する加盟校調査について、理事会・執行部から疑問が出され、委員会でも検討した結果、当委員会の活動を設立当初の目的に沿ったものへと方向を修正する。

本来、当渉外委員会が提携することを期待されている関係機関とは、私立大学協会、日本看護系大学協議会などの大学関係機関、文部科学省や厚生労働省などの国の機関などである。現在、私立看護系大学が直面している最大の問題の一つは、看護系大学の急激な増加とそれに伴う教員確保の困難さ及び教員（教育）の質の担保であろう。

そこで、当委員会では、この問題について関係機関の考えを知り、改善に向けた働きかけをしていくことを今後の活動方針とする（従って、国家試験関連の事業については当分扱わない）。具体的な活動内容としては、私立看護系大学の喫緊の課題である看護系大学の急激な増加と今後の展望について、上述の団体担当者および本協会役員によるシンポジウムを企画・実施する予定である。

**日本私立看護系大学協会**
**関係機関との連携等に関する社会的事業セミナー**
**「看護師国家試験を考える」アンケート集計結果**
回収数：101 人

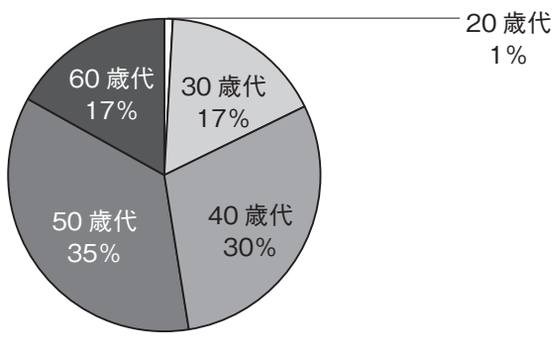
Ⅰ．参加者ご自身について

1．ご所属の大学の種類

①大学　94 人
②短期大学　6 人
③その他　1 人

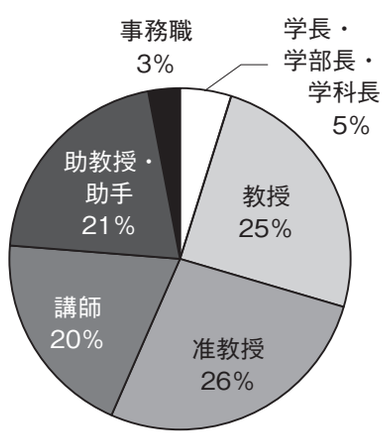
2．年齢

① 20 歳代　1 人
② 30 歳代　17 人
③ 40 歳代　30 人
④ 50 歳代　36 人
⑤ 60 歳代　17 人




3．現在の役職

①学長・学部長・学科長　5 人
②教授　25 人
③准教授　27 人
④講師　20 人
⑤助教・助手　21 人
⑥事務職　3 人
⑦その他　0 人




4．専門領域

①基礎　14 人
②成人　15 人
③老年　15 人
④精神　13 人
⑤小児　11 人
⑥母性助産　11 人
⑦公衆衛生　4 人
⑧在宅　8 人
⑨看護管理　1 人
⑩専門基礎　2 人
⑪遺伝看護　0 人
⑫その他　5 人（うち 1 人：国試対策室専任）

Ⅱ．講演内容について

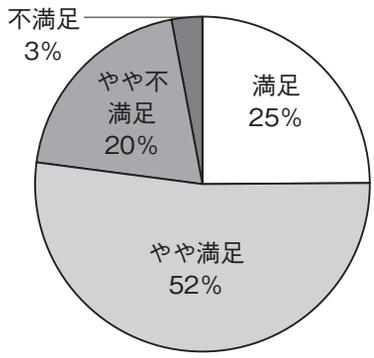
1．講演−1について

①満足　25人

②やや満足　52人

③やや不満足　20人

④不満足　3人




ご意見（抜粋）

・これからのことがわかり対策をたてることができそうです。

・H 30年度から改訂があることを確認できてよかったです。

・厚労省のお考えの一端がわかったように思います。

・実際のところの自分の認識が正しいか確認できてよかったです。

・方向性はわかりましたが、昨今の国試によせられた意見を聞きたかったと思います。問題の適切性について→不適切も多いので。

・大学の設置は文科省の裁量のため、厚労省＋文科省の方がいらっしゃってセミナーを開催していただくと、より充実するのでは？と思いました。

・新たな情報は特になかったので少し残念ですが、今後の返答で新たな知見があるとうれしいです。

・現状と課題について理解できました。1年前に会場（ホテル）を押さえる件ですが、国試会場に問題があるのでは（増やす方向）と思います。

・もう少し今後の国試に関する内容が知りたかった。変更の意図、方向性など。

・もう少し質問したかった。

・現時点で考えられる社会の傾向、今後求められるものから問題傾向についてお話が聞けると更に良かったと思います。

・本当に聞きたい部分ではなかった。

・試験問題公募の部分だけ強調された。質問に対しての返答があいまいな部分あった。

・目新しいことがあまりなかった。

・たいてい知っている内容で、もう少し掘り下げた話を伺えたら嬉しかったです。

・公募が中心テーマであるなら、それを副題として書いていただきたいと思います。別な内容をイメージして参加しました。意見交換はとても意味のあるものでした。

・H 30～実際にどのような方向性に出題内容が変わるのかを伺うことができると思っておりました。遠方より参加させて頂きましたので非常に残念です。

・もう少し、H 30年からの改定内容を具体的に話してほしかった。

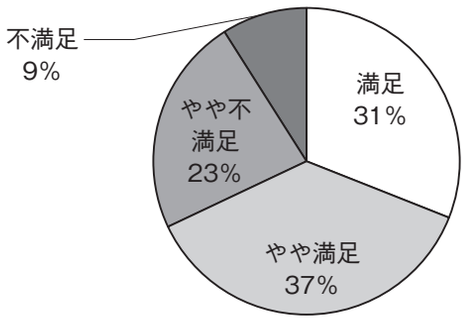
2．講演−2 について

①満足　31 人

②やや満足　37 人

③やや不満足　23 人

④不満足　9 人




ご意見

・理想ではなく、ありのままの教育状況を話してくださったのでわかりやすく、活用できる講演内容で良かった。

・恵まれた環境での教育だと思いました。

・充実したサポート体制のもと、貴学（自校）の教育をしっかり整えることがすばらしい結果に結びついていることがわかりました。

・学習環境を整えていくことの大切さがわかりました。カリキュラムの見直しが必要では…と思いました。

・看護教育のあるべき姿を教えていただきました。

・与えられた資源の違いはありますが、根本・本質として学ぶところが多くありました。ティーチングではなく、ラーニングであるという考えの確信を強めることができました。学生を信じ、自立をすすめる存在でありたいと思います。

・来場者のほとんどが私立大学で、講演内容の公立とは背景が違いすぎるので、私立の中の成功例を聞きたい。

・私学のおかれた状況と全く異なるところは参考にしにくい。言われる事は当たり前。

・そもそも偏差値 40 点程度の学生が多い中での普段からのサポートでは何をしていったらよいのか…と悩む毎日です。

・環境が整っていない中で、どう取り組むかという内容をききたかった。

・私立大学は 1 学年 100 名程度です。そのような大学でどのようにされているか、知りたかったです。

・学生の偏差値も高い学校でうらやましいです。E-learning は参考になった。

・恵まれた環境の大学、偏差値のある程度の高さがあるのでできる事例ではないかなと感じた。

・私立の学生と公立の学生は入学時の基礎学力が異なります。私立は公立に不合格した学生を必死に教育しています。今回、公立の話ではなく、私大の話を聞きたかったです。

・私大の低学力者に対する国試対策や講義内容などを聞きたかった。

など

３．今後のセミナーで取り上げてほしいことなど、ご意見・ご要望

（国試対策）

・低学力校の国試対策、合格率100％への道のり、など。

・国試の合格率がかつて悪かったが、近年高くなった学校の取り組みを聞きたかった。

・私立の中の成功例をぜひ聞きたいです

・同様の国試の対策について私学系大学の対策を希望します。特に、出題基準が改訂するときにはセミナー開催をお願いしたいです。

・国試対策に頑張っている大学の話が聞きたい。

（他の希望）

・実習施設の確保が困難な中、いかに学生に学びを深めさせてゆくか。

・看護学科としてのFDやキャリアアップ等の取り組み。ポートフォリオ、パフォーマンス評価の取り組み。3つのポリシー、質評価について。

・学内での連携体制。

・大学院教育の方法について。

（ご意見・感想など）

・遺伝看護の学部教育について（内容、教員の質と確保、国試への導入について）。

・今野先生の取り組みのお話しはとても参考になりました。1つでも（あきらめずにのきもちで）実現に向けて取り組む思いをもっていきたいと思います。ありがとうございました。

・結構、私語をしている人が多くて、おどろきました。

・本年度のような内容であれば、是非とも参加したいと思いました。

## ６．会報・出版等の広報に関する事業

### 趣旨

①本法人の目的の達成に寄与するため会報・その他刊行物の発行
②加盟校への情報伝達及び加盟校間の情報交換
③協会の活動の外部への PR のためホームページの企画運営
④上記に関連する本法人の提言又は要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告

### 代表者および委員会構成員（◎：代表者　○：担当理事）

◎野口　眞弓（日本赤十字豊田看護大学）
○島袋　香子（北里大学）
小林　尚司、中島佳緒里（日本赤十字豊田看護大学）、香取　洋子、和智志げみ、及川　美穂（北里大学）

### 活動経過

1）　会報第 35 号・36 号の発刊
会報第 35 号は平成 28 年 5 月上旬に、会報第 36 号は平成 28 年 11 月上旬に発刊した。
内訳：会員校　各 50 部
事務局　200 部
これに伴う編集会議は，各号につき 5 回開催し，原稿の依頼や入手は電子メールで行った。

2）　年報、会報、ホームページ等の広報活動の充実
・年報の冊子体の配布を各加盟校 3 冊とし、平成 28 年度年報からホームページに掲載する準備を進めた。
・各種事業で行った講義概要、アンケート結果などを掲載した報告書は、冊子体の作成をやめ、ホームページでの報告とした。
・新規加盟校紹介や加盟校の取り組みをホームページに掲載するためには、ホームページの整理が必要である。次年度にホームページの更新を検討する。
・加盟校間で情報交換をするシステムとして、オープンキャンパスや公開講座の情報をホームページに載せた。

### 今後の課題

ホームページでの情報発信を効果的に行えるように、ホームページの更新を行う。

## ７．将来構想検討に関する事業

**趣旨**

①本法人の役割と機能の強化に向け、私立大学としての課題と看護学校教育及び看護学研究の具体的な課題の明確化と今後の方向性について具体的方策の提案を行う。

②上記に関連する本法人の提言または、要望の案のとりまとめと理事会及び総会への報告を行う。

**代表者および委員会構成委員**（◎：代表者　○：担当理事）

◎高田　早苗（日本赤十字看護大学）

○坪倉　繁美（国際医療福祉大学）

菱沼　典子（聖路加国際大学）、遠藤　俊子（京都橘大学）、田中　幸子（東京慈恵会医科大学）、佐藤　弘毅（目白大学）、山本　雅淑（大正大学）

**活動目標**

1）組織の機動性と活性化を図るとともに会員校に有益な事業を展開するための、役員の選出方法について見直す。

2）看護系大学全体の資質向上のために、教員研修についての系統的な研修体系を作成する。

3）私立大学への財政的支援を確保するために、私立大学を取り巻く動向や情報収集を行うとともに、関係機関との連携を密にする。

**活動経過**

1）　勉強会

日　時：平成 28 年 4 月 6 日（水）　14 時 00 分～ 16 時 30 分

場　所：日本私立看護系大学協会事務局

講　師：佐藤　弘毅委員

出席者：高田　早苗、坪倉　繁美、菱沼　典子、山本　雅淑（講師含め 5 名）

議　題：社会・経済の変化に伴う人材需要に即応した質の高い専門職業人養成のための新たな高等教育機関の制度化について討議した。

2）　第 1 回将来構想検討委員会開催

日　時：平成 28 年 10 月 28 日（金）　18 時 00 分～ 20 時 00 分

場　所：日本私立看護系大学協会事務局

出席者：高田　早苗、坪倉　繁美、菱沼　典子、遠藤　俊子、佐藤　弘毅、山本　雅淑

議　題：①役員選出内規の改正案、関連する定款改定案の検討

選挙人、被選挙人、選挙管理委員会の設置等に伴う関連規程について検討した。

地区別の区割り、地区活動・機能等についての検討を行った。

②教員研修についての系統的な研修体系の作成と実施体制について

大学教員（幹部教員・中堅教員・新任教員）としてのコンピテンシーを考慮した研修

を体系化した。体系化にあたっては、大項目4項目、小項目全10項目、小項目ごとに期待する研修効果を明確にした。大項目には、「ガバナンス・経営」「「組織の教育力向上」「研究能力維持向上」「社会貢献」の4側面を設定した。

3）第2回将来構想検討委員会

日　時：平成28年12月26日（月）　10時00分～12時00分

場　所：日本私立看護系大学協会事務局

出席者：高田　早苗、坪倉　繁美、菱沼　典子、田中　幸子、佐藤　弘毅、山本　雅淑

議　題：①役員選出改正案の検討

役員選出は、現行の「理事及び監事等の選出内規」を廃止し、新たに「役員選出規程」を設ける。新たな規程には、役員候補者選挙に必要な事項、全国を6地区に区分けし役員を選出する方法、指名理事の導入などを規定する。

また新たな規程と定款との整合性も検討した。

②教員の研修体系の活用について

体系化した研修体系の内容や考え方については、第3回定例理事会（11月25日開催）で承認を得た。開催地の利便性、加盟校の能力形成を促すような活用の在り方を検討してほしいという理事会の意見を受け、活用の仕方を検討した。

**活動目標に伴う活動の総括**

1）組織の機動性と活性化を図るとともに会員校に有益な事業を展開するための、役員の選出方法について見直す。

役員の選出方法については、平成27年度に引き続き検討を重ね、一定の方向性を理事会に提案した。

新たに「役員の選出規程」を制定し、役員の選出の透明性を図るとともに、地方にある大学が事業やセミナーの恩恵を享受できるよう配慮したものとなるように検討した。「役員の選出規程」には、役員を地区別で選出すること、事業の円滑運営を図るために指名理事の導入などを規定することなどを理事会に提案した。

2）看護系大学全体の資質向上のために、教員研修についての系統的な研修体系を作成する。

看護系大学全体の資質向上のための教員研修については、平成27年度に引き続き検討を重ね、系統的な研修体系を作成した。急増する会員校の質保証については、新任教員対象の研修会に加え、新人を育てるなどの役割を担っているところの大学の中核・中堅を担う中堅教員、教育責任者としての任を担う幹部教員には、それぞれの役割やキャリアに応じた研修に取り組む必要がある。体系化にあたっては、内容的にも、教員のキャリア別にも、大学教員としてのコンピテンシーを吟味し体系化を行った。研修体系の大項目としては、「ガバナンス・経営」「組織の教育力向上」「研究能力維持向上」「社会貢献」の4側面とした。

これらの活用については、研修を企画する、コンピテンシーの点検維持を行うなどの際に活用できる。本法人の各委員会における事業の企画・運営、本法人が地方で開催する研修の企

画・運営、あるいは各大学で行われるFD活動等での事業展開や研修の企画など、あらゆる方面で活用できるものである。

3）私立大学への財政的支援を確保するために、私立大学を取り巻く動向や情報収集を行うとともに、関係機関との連携を密にする。

補助金獲得については、継続的、多角的な取り組みが必要である。連携・協議は、文部科学省高等教育局医学教育課に対する対応に限らず、私学事業団等への相談等、近接領域学科の動向を確認し、参考にしていく必要もある。本法人における実行上の取組みは、理事会、本法人委員会の渉外委員会をはじめ、関連する各委員会で進める。

なお、中央教育審議会に諮問され「実践的な専門職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する特別部会」が検討を進めているところの「専門職大学（仮）」への対応についての制度設計や運用に関しては、日本看護系大学協議会や私立大学協会、日本看護協会との連携等を図りながら、その動向を注意深く見極めていく必要がある。

## 今後の課題

会長の諮問委員会である将来構想検討委員会は、本法人の役割と機能の強化に向け、私立大学としての課題と看護学校教育及び看護学研究の具体的な課題の明確化と今後の方向性について具体的方策の提案を行うという趣旨のもとに設けられている。平成28年度は、組織の機動性と活性化を図るとともに会員校に有益な事業を展開するための方向性として、役員の選出方法の見直しや、教員の研修体系の策定などを行い、将来構想検討委員会の設置趣旨に沿った一定の方向性を理事会に提案した。

## 8．40 周年記念事業

**趣旨**

本協会設立 40 周年を祝し記念事業として、記念式典、記念講演・シンポジウム、祝賀会と記念誌発行を行う。

**代表者および委員会構成員**（◎：代表者　○：担当理事）

記念式典委員会

◎野口　眞弓（日本赤十字豊田看護大学）

髙木　廣文（共立女子大学）、福島富士子（東邦大学）、筒井真優美（日本赤十字看護大学）、近藤　潤子（天使大学）、飯田加奈恵（城西国際大学）、河津　芳子（目白大学）、クローズ 幸子

記念誌委員会

◎島袋　香子（北里大学）

小島ひで子（北里大学）、林　　優子（大阪医科大学）、岡田　由香（岐阜医療科学大学）、福島　道子（徳島文理大学）、北　　素子（東京慈恵会医科大学）

**活動経過**

○記念式典委員会

以下のように記念式典・特別講演・シンポジウム・祝賀会を行った。

1．記念式典　平成 28 年 7 月 16 日 13 時 30 分～ 14 時

2．記念講演・シンポジウムのテーマ 「看護実践をかえるための教育改革」

3．記念講演　平成 28 年 7 月 16 日 14 時～ 15 時 30 分

Quality and Safety Education for Nurses（QSEN）―看護師のための質と安全の教育―

演者：Jane H Barnsteiner（University of Pennsylvania School of Nursing）

座長：井部　俊子（聖路加国際大学）

4．シンポジウム　平成 28 年 7 月 16 日 15 時 45 分～ 17 時 15 分

「看護実践をかえるためのカリキュラム改革」

米国におけるカリキュラムと臨地実習の実際

Jane H Barnsteiner（University of Pennsylvania School of Nursing）

臨地実習の根本改革

クローズ　幸子（亀田医療大学名誉教授）

TOHO いえラボプロジェクト　これからの看護師は「まち」のなかの「いえ」で学ぶ

横井　郁子（東邦大学）

座長：筒井真優美（日本赤十字看護大学）

5．記念式典・記念講演会場

東京国際交流館　プラザ平成会議施設

【住所】〒 135-8630　東京都江東区青海 2-2-1　国際研究交流大学村内

6．祝賀会　平成 28 年 7 月 16 日 18 時～ 20 時

ヒルトン東京お台場【住所】〒 135-8625 東京都港区台場 1-9-1

7．参加人数

記念式典、記念講演、シンポジウムは 402 名、祝賀会は 101 名が出席した。

○記念誌委員会

以下の予定で作業を行なう。

完成 12 月予定であったが、作業の進捗に合わせて 2 月 28 日に発行した。

1)　作業に合わせて業者との打ち合わせを行なった。

2)　メール会議で編集委員会を開催した。

3)　2 月初旬：編集委員会を開催した。

完成版：A4 版。カラー刷り・114 頁。

1．印刷業者等決定…平成 28 年 3 月…「新日本印刷株式会社・新日本編集企画」に決定する。

2．原稿依頼

日本私立看護系大学 40 周年記念誌発刊にあたり…井部　俊子（会長）…11 月に依頼

日本私立看護系大学協会 40 年のあゆみ…近藤　潤子（前会長）…11 月に依頼

3．記念式典祝辞…ご来賓…7 月

4．記念講演会：レジメ…7 月…会報 36 号原稿を転用

Jane H Barnsteiner（University of Pennsylvania School of Nursing）

5．記念シンポジウム：レジメ…7 月

クローズ　幸子（元亀田医療大学）…会報 36 号原稿を転用

横井　郁子（東邦大学）

Jane H Barnsteiner

6．特別寄稿…6 月…入稿済

日野原重明（初代会長）

森　美智子（前業務執行理事）

野口　眞弓（業務執行理事）

7．40 周年記念座談会Ⅰ…6 月 18 日終了…校正へ

「私立看護系大学協会の過去・現在・未来」

井部　俊子（会長）

佐々木秀美（副会長）

近藤　潤子（前会長）

矢野　正子（前副会長）

菱沼　典子（前将来構想検討に関する事業担当理事）

森　美智子（前業務執行理事）

司会：福島　道子（徳島文理大学）

8．40 周年記念座談会Ⅱ…7 月 30 日終了…校正へ

「私立大学における看護教育を展望する」

岡田　由香（岐阜医療科学大学）
林　みよ子（天理医療大学）
本庄　恵子（日本赤十字看護大学）
司会：林　　優子（大阪医科大学）

9．資料

協会活動一覧等…12 月入稿
研究助成・奨励賞等一覧
加盟校一覧

10. 歴代会長・理事一覧

日本私立看護系大学協会　定款

11. 40 周年記念式典・記念誌委員一覧

12. 編集後記

# Ⅲ　40 周年記念講演会資料

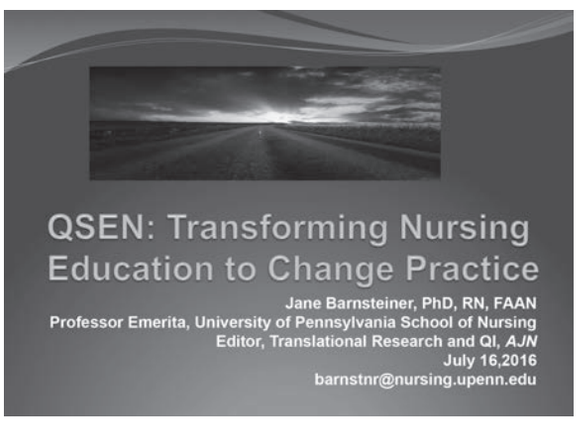
日本私立看護系大学協会 40 周年記念講演会　資料

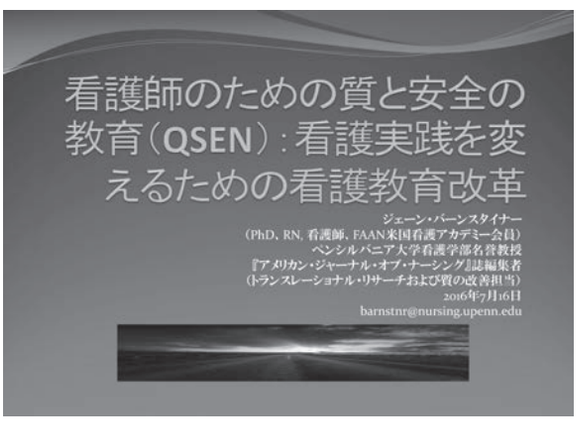
# Quality and Safety Education for Nurses（QSEN）

## ―看護師のための質と安全の教育―

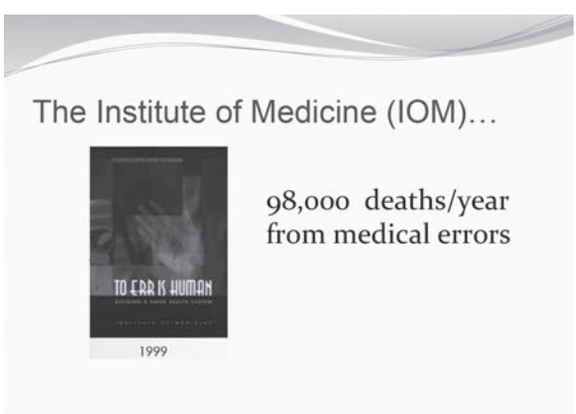
Jane H Barnsteiner（Professor Emerita，University of Pennsylvania，School of Nursing）

1

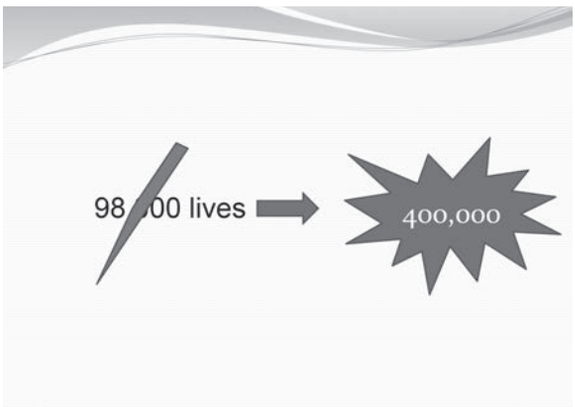


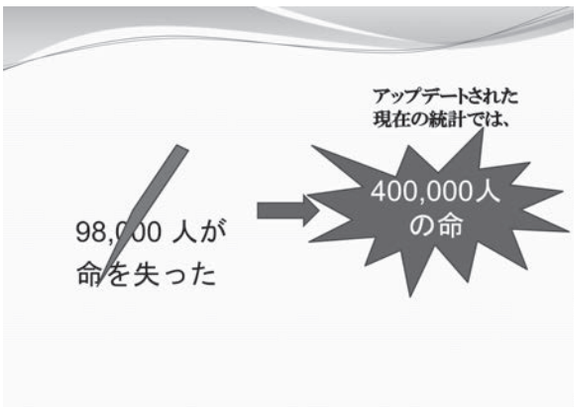




2



3




4

## Japan – Patient Safety

- 2005 - Japan Council for Quality Health Care –
  - Mandatory reporting of deaths and serious events: deaths, hiyari (chilly) or hatto (alarming) adverse events.
  - Hospital accreditation
- 2011 Med errors/adverse drug events rates similar to other countries (Morimoto, 2011)

## 日本における患者の安全

- 2005年—日本医療機能評価機構—
  - 死亡および重大な出来事の報告義務：死亡やヒヤリ・ハットを伴う有害事象
  - 病院の認証評価
- 2011年　医療エラーや薬物有害事象の発生率は諸外国並み（モリモト、2011年）

5

## Unfortunately care is not safer . . .

## 残念ながら、ケアの安全性は高まっていない・・・

病院はあなたの健康にとって有害であるかもしれない

6

## Where are we?

"In the 16 years since *To Err is Human*, evidence that *care is getting safer is scant or absent.* Progress has mostly set the stage for the vital work that remains. The path to safe care involves changing nearly every aspect of health care delivery."

(The Rand Corporation, 2014)

## 現状

「『人は誰でも間違える』（*To Err is Human*）の発表から16年、その間に*ケアの安全性が高まっていることを示す証拠はわずかか、もしくは、存在しない。*進歩により、欠くことができない残された作業のお膳立てはほぼ整った。安全なケアにたどりつくためには、ヘルスケアの提供について、ほとんどすべての側面を変える必要がある。」

（ザ・ランド・コーポレーション、2014年）

7

## Raising the Bar

All health professionals should be educated to deliver *patient-centered care* as members of an *interdisciplinary team*, emphasizing *evidence-based practice*, *quality improvement approaches*, and *informatics*.

Committee on Health Professions Education, Institute of Medicine (2003)

## 目標水準の引き上げ

**すべての保健医療従事者は、エビデンス（実証された研究結果）*に基づく実践、質の改善の取り組み*、および*情報科学*を重視し、*多職種によるチーム*の一員として*患者中心のケア*を提供するための教育を受けるべきである。**

米国医学研究所
保健医療従事者教育委員会（2003年）

8

## What could nursing do?

**Find a way**: prepare nurses with the competencies necessary to continuously improve the quality and safety of the health care systems in which they work

- Lead: Linda Cronenwett, PhD, RN, FAAN
- Co-leads: Jane Barnsteiner, Joanne Disch, Jean Johnson, Pam Mitchell, Dory Sullivan, Judith Warren

***Quality & Safety Education in Nursing (QSEN)***

## 看護にできることは何か

**方法の開発**：自らが働くヘルスケアシステムの質と安全をたゆまず改善していく上で必要な能力を看護師に身に付けさせる。

- 代表：リンダ・クローネンウェット（PhD、RN、米国看護アカデミー会員）
- 共同代表：ジェーン・バーンスタイナー、ジョアン・ディッシュ、ジーン・ジョンソン、パム・ミッチェル、ドリー・サリバン、ジュディス・ウォレン

***看護師のための質と安全の教育（QSEN）***

9

## What QSEN did - 2006 - 2015

- Developed and disseminated 6 competencies, definitions and learning objectives (162 Knowledge, Skills, Attitudess) for **pre-licensure and graduate education**
  - Faculty conferences, books, publications, learning modules
- Assessed state of quality & safety education in schools of nursing nationwide
- Implemented website www.qsen.org
- Implemented accreditation standards
- Hold annual QSEN Conference

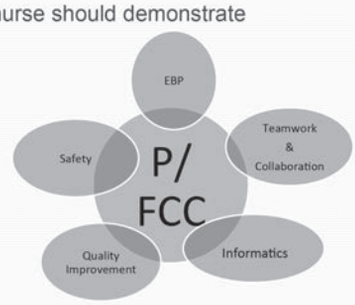
## QSENの実績—2006～2015年

- **免許取得前および大学院**での看護教育において、6つの能力とその定義と学習目標（162項目の知識と技能と態度）を定め、普及させた。
  - 教員カンフェランス、書籍、出版物、学習モジュール
- 全国の看護師養成機関における質と安全の教育の状況を評価した。
- ウェブサイト www.qsen.org を発足した。
- 認証評価基準を導入した。
- 年次QSENカンファレンスを開催した。

10

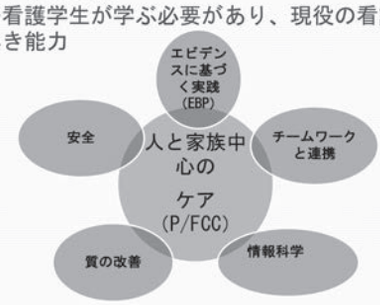
## IOM/QSEN Competencies –

what every nursing student needs to learn and practicing nurse should demonstrate




## 米国医学研究所（IOM）によるQSENの能力—

すべての看護学生が学ぶ必要があり、現役の看護師が示すべき能力




11

| QSEN Competencies (162 KSAs) | Japan – 10 Key Points In Providing Safe Healthcare (JNA)(Maeda, 2011) |
|---|---|
| Patient Centered Care | Dialog and Patient Participation<br>Manage Own Healthcare |
| Teamwork & Collaboration | Staff Communication |
| Evidence-Based Practice | |
| Safety | Safety Culture<br>Anticipate Risks<br>Medication Administration<br>Improve Environment<br>Rules and Protocols |
| Quality Improvement | Problem Solving Approach |
| Informatics | Utilize Technology and Innovation |

| QSENの能力（162項目の知識と技能と態度（KSA））| 日本 —安全なヘルスケアを提供するための10の要点（日本看護協会（JNA））（マエダ、2011年） |
|---|---|
| 患者中心のケア | 対話と患者の参加<br>自分自身の健康の管理 |
| チームワークと連携 | スタッフ間のコミュニケーション |
| 根拠に基づく実践（EBP） | |
| 安全 | 安全文化<br>リスクの予測<br>薬剤の管理　（与薬の管理）<br>環境の改善<br>規則と手順 |
| 質の改善 | 問題解決手法 |
| 情報科学の活用 | 技術と新しい工夫を役立てる |

12

## Patient/Family Centered Care

*Old – Listen to patient and demonstrate compassion and respect.*

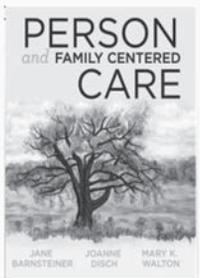
New - Recognize the patient or designee as the source of control and full partner in providing compassionate and coordinated care based on respect for patient's preferences, values and needs

## 患者/家族中心のケア：視点の相違

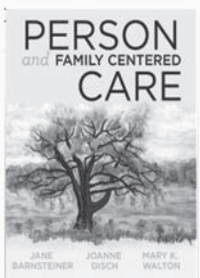
*旧 —患者の声に耳を傾け、思いやりと尊重の気持ちを示す。*

**新—患者または代理人を、意思決定の主体者として全面的なパートナーと認識し、患者の価値観・ニーズに敬意を払い、それに基づいて、心のこもった、連携ケアを提供する**

13




1. Many people receiving care aren't in hospitals
2. People with chronic illness don't consider themselves patients
3. In general, we're moving toward promoting health and wellness, preventing people from becoming ill
4. Koloroutis and Trout: "*See me as a person*"




1. ケアの対象者の多くは、病院内ではなく、外に存在している。
2. 慢性疾患をもっている人には、自分が患者であるという自覚がない。
3. 全体としては健康とウエルネスを向上させ、病気になるのを予防する方向に進みつつある。
4. コロルティスとトラウトの共著『私を人として見て』（Koloroutis and Trout："*See me as a person*"）

14

## Person-Centered Care

- Recognize the patient or designee as the *source of control and full partner* in providing compassionate and coordinated care based on respect for patient's preferences, values and needs

Orthopedist goal – uneventful hip replacement surgery
Nursing goal – discharge with no complications
Patient goal – be back on golf course
(Assess, document and measure patient goal outcomes)

## 対象者中心のケア

- 患者あるいは代理人を***意思決定の主体者として、また全面的なパートナーとして認め***、患者の選択、価値観、ニーズを尊重し、心のこもった連携ケアを提供する。

対象者中心のケア目標の例：

整形外科医の目標 — 人工股関節置換手術無事に終わること
看護の目標 —合併症を起こさずに退院させること
患者の目標 —再びゴルフコースに復帰すること
（患者目標の結果を評価し、測定し、記述すること）

15

## From health care to health creation

(D. Berwick)

| Level 1 | Level 2 | Level 3 | Level 4 |
|---|---|---|---|
| **Disengaged and overwhelmed** | **Becoming aware, but still struggling** | **Taking action** | **Maintaining behaviors and pushing further** |
| Individuals are passive and lack confidence. Knowledge is low, goal-orientation is weak, and adherence is poor. Their perspective: "My doctor is in charge of my health." | Individuals have some knowledge, but large gaps remain. They believe health is largely out of their control, but can set simple goals. Their perspective: "I could be doing more." | Individuals have the key facts and are building self-management skills. They strive for best practice behaviors, and are goal-oriented. Their perspective: "I'm part of my health care team." | Individuals have adopted new behaviors, but may struggle in times of stress or change. Maintaining a healthy lifestyle is a key focus. Their perspective: "I'm my own advocate." |

Increasing Level of Activation

## 健康のケア（ヘルスケア）から健康の創出へ

（D・バーウィック）

| Level 1 | Level 2 | Level 3 | Level 4 |
|---|---|---|---|
| **離脱、困惑** | **気づきはじめているが確かではない** | **行動を起こす** | **行動を維持し前進する** |
| 人々は、受動的で自信が持てない。健康に関する知識や目的志向が弱く、守ろうとする意思は乏しい。<br>彼らの視点:<br>「私の健康は医師に任せてある」 | 人々は、多少の知識はあるが、大きなギャップが存在している。健康は、自分のコントロール能力の外にあると信じているが、単純な目標を立てることができる。<br>彼らの視点:「自分でもっと努力をする余地はある。」 | 人々は重要な事実を知っていて、自己管理のスキルを構築している。目標に向かって最善の実践行動によって努力をしている。<br>彼らの視点:「私は、ヘルスケアチームの一員である。」 | 人々は新しい行動を受け入れるが、ストレスや転機到来の時、危機があるかもしれない。健康なライフスタイルを保持することに重点を置いている。<br>彼らの視点:<br>「私は自分自身の擁護者である。」 |

活性化のレベルが高められる

16

## So what is different here?

- *patient or designee as the source of control and full partner*
- *a partnered relationship with caregivers*
- *equipped with relevant information, resources, access and support*
- *fully engage in and/or direct the health care experience as they choose.*

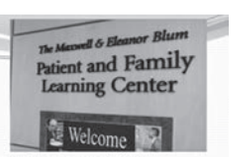
## 違いは何か:

- *患者または代理人は意思決定者であり、ケアに関して、全面的な権利を持ったパートナーである。*
- *ケア提供者とはパートナーの関係である。*
- *関連ある情報、資源が備えられ、利用と支援がえられる。*
- *自己のヘルスケア経験に全面的にかかわるか、それに指示を与えるか選択する、*

17

## Organizationally what does PFCC look like?

- A mission/vision statement with principles
- Pt/family satisfaction surveys
- Patient/family advisory councils
- Patient-care rounds at bedside with P/F participation
- Website with consumer information/education
- In-house educational TV and Orientation video
- Engagement/activation strategies such as Family orientation w/notebook




## PFCCを導入している機関の特色：

- ミッションやビジョンの中に基本原則として表示
- 患者や家族の満足度調査
- 患者・家族諮問委員会
- 病床の患者ケアの巡回時に、患者・家族も参加する。
- ウェブサイトによる消費者向け情報や教育
- 院内教育用テレビ番組やオリエンテーション用ビデオ
- ノートパソコンを使った家族オリエンテーションなどの戦略に参加/活性化

18

## What can this look like?

*Redistributing responsibility*
(Long Island Jewish Hospital)

- 26 year old with CF delivered healthy baby
- Developed system for med self-administration
- Patients who opt to self-administer –
  - special locked boxes containing medications.
  - document meds and nurses review
  - nurses and pharmacists keep box replenished

## PFCC を導入した病棟の具体的な例：

*責任の再分配*
（ロングアイランド・ジューイッシュ病院の例）

- 26歳の嚢胞性線維症患者が健康な赤ちゃんを出産
- 薬剤の自己管理システムを開発
- 自己管理を選択した患者 —
  - 薬剤を納め、施錠された容器が配置され、
  - 薬剤の記録、看護師による点検
  - 常時、看護師と薬剤師が容器に薬剤を補充

19

## Outcomes

- Reduced ALOS for CF patients from 11 to 7 days
- Patient and professional satisfaction surveys
  - < 20% before the intervention to > 95%.

## 成果

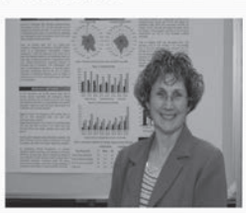
- 嚢胞性線維症患者の平均在院日数（ALOS）が11日間から7日間に短縮
- 患者と医療従事者の満足度調査
  - 介入前の20%未満から、95%を超える

20

## Evidence-Based Practice

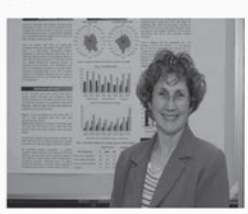
*Old – Adhere to internal policies and procedures.*

*New* - Integrate best current evidence with clinical expertise and patient/family preferences and values for delivery of optimal health care.



## エビデンス（実証された研究結果）に基づく実践（EBP）

*旧 —院内の方針と手順に固執*
*新* —最新のエビデンス（実証された研究結果）と臨床経験を統合し、患者や家族の選択や価値観にあわせた、最適のヘルスケアを提供する



21

## Why the focus on EBP?

- Leads to higher quality of care, improved patient outcomes, decreased costs, and greater nursing satisfaction.
- Significant gaps in care:
  - 30 – 40% do not receive treatments proven effective,
    - Antibiotics before and after surgery
  - 20 – 25% receive treatments that are not needed or are potentially harmful
    - Overuse of antibiotics

## EBPに注目する理由

- ケアの質の向上、患者のケア・アウトカムの改善、コストの削減、看護師の満足度の向上につながる。
- ケアにおけるかなり大きな差:
  - 30～40%は有効性が証明された治療を受けていない。
    - 手術前後の抗生物質の使用

    20～25%は不要な、または、有害な可能性がある治療を受けている。
    - 抗生物質の過剰な使用

22

## Do I hear myself saying…

- *We've always done it this way*
- *That's not our way*
- *As soon as this change is over, we can do it*
- *I'm just not comfortable with change*
- *It's just not the way it used to be*
- *I'm just not a creative person*

## 自分でもこんな言葉を口にしていないだろうか…

- *いつも、こうやってきた。*
- *それは私たちのやり方ではない。*
- *これが変われば、すぐにでもできる。*
- *私にとって、「変化」は不愉快なものである。*
- *昔は、そんなやり方はしなかった。*
- *私は本来、創造的な人間ではない。*

23

## 2015 National Survey-Sacred Cows

| Practice | True | False |
|---|---|---|
| Shock - Trendelenburg | | |
| Scrub the hub | | |
| Instill NSS NTT | | |
| Auscultate G-tube | | |
| Ph testing G-tube | | |
| Aspirate subglottic secretions to prevent VAP | | |

## 2015年全国調査—

批判することなく行われている実務

| 実務 | 真 | 偽 |
|---|---|---|
| ショック時のトレンデレンブルグ体位 | | |
| ハブのスクラブ洗浄 | | |
| 生理食塩水やNTTの点滴 | | |
| 胃瘻チューブの聴診 | | |
| 胃瘻チューブのPh検査 | | |
| 人工呼吸器関連肺炎（VAP）の予防を目的とする声門下分泌物の吸引 | | |

24

## 2015 National Survey- Sacred Cows

(red is correct)

| Practice | True | False |
|---|---|---|
| Shock - Trendelenburg | 51% | 49% |
| Scrub the hub | 81% | 19% |
| Instill NSS NTT | 35% | 65% |
| Auscultate G-tube | 31% | 69% |
| Ph testing G-tube | 51 | 49% |
| Aspirate subglottic secretions to prevent VAP | 29% | 71% |

## 2015年全国調査—

批判することなく行われている実践
（赤字が正しいものを示す）

| 実務 | 真 | 偽 |
|---|---|---|
| ショック時のトレンデレンブルグ体位 | 51% | 49% |
| ハブのスクラブ洗浄 | 81% | 19% |
| 生理食塩水やNTTの点滴 | 35% | 65% |
| 胃瘻チューブの聴診 | 31% | 69% |
| 胃瘻チューブのPh検査 | 51 | 49% |
| 人工呼吸器関連肺炎（VAP）の予防を目的とする声門下分泌物の吸引 | 29% | 71% |

25

## What do you think?

- Are we evidence-based when we like the evidence?
  - Can you think of any practices that we should stop doing because of the evidence?
  - Any that we should do because there's adequate evidence?

## あなたの意見は？

- エビデンスを好むことが、エビデンスに基づくことになるのか。
  - エビデンスに基づいてやめるべき実務（看護行為）を何か思いつくか。
  - 適切なエビデンスがあるので実施すべき実務（看護行為）が何かあるか。

26

## EBP - Staff nurse use of research

(Yoder, AJN 9/14)

***Move from this:***

Where do you get your evidence?

- Personal Experience – 75%
- Policies and Procedures 58%
- Peers 55%
- Intuition – 32%
- Use of journals, internet – 25%

- 36% avoid using research as they perceive they do not have authority to use even if useful.

## EBP—看護職員の研究活用状況

（ヨーダー、AJN、2014年9月）

***従来の実践現状：***

どこからエビデンスを得ているか。

- 個人的経験—75%
- 方針と手順—58%
- 同僚—55%
- 直観—32%
- 学会誌やインターネットを利用—25%

- 36%は、たとえ有益であっても、それを使用する権限が自分にはないと感じて、研究を活用することを避けている。

27

## Choosing Wisely Campaign
(ABIM & AAN, 2014)

Don't

1. Automatically initiate continuous electronic FHR
2. Let elderly lay in bed or be in chair for hours during hospitalization
3. Use physical restraints for older persons
4. Wake for routine care
5. Place or maintain UC without specific indication

## 賢明な選択キャンペーン
（ABIM & AAN、2014年）

してはいけない：

1. 胎児心拍数（FHR）の電子的な連続測定を自動的に始めること
2. 入院中の高齢者を長時間にわたりベッドに寝かせておいたり、いすに座らせておいたりすること
3. 高齢者の身体を拘束すること
4. ルティーンケアのため眠りから目覚めさせること
5. 特別な必要がないのに尿道カテーテル（UC）を挿入または留置すること

28

## Addressing Challenges to EBP

- Access to timely, relevant and accurate information—every nurse—not just certain nurses on committees
- Organizational commitment to integration of new knowledge
  - Addressing resistance to change
  - Budgeting time
- All nurses engage in EBP
  - Formulate questions —PICO
  - Integrate existing knowledge
  - Know how to find information
  - Evaluate strength of information
- Resources for EBP

## EBPへの挑戦

- タイムリーで正確な関連情報の利用—委員会に参加している一部の看護師だけでなく、すべての看護師に向けた
- 新たな知識を取り入れるための組織的対応
  - 変化に対する抵抗に対処
  - 時間の有効利用
  - すべての看護師がEBPに取り組む
  - 研究課題（質問）の定式化—PICO（対象者・介入・比較・結果）
  - 既存の知識と統合する
  - エビデンスの検索の方法を学ぶ
  - エビデンスの証拠力を評価する
- EBPのための資源

29

## Integrate EBP at the POC

- Secure resources to easily access current evidence
- Include EBP use in position descriptions/ performance appraisals –
- Evaluate web content on main patient diagnoses using CARS (credible, accurate, reasonable, supported)
- Discuss practice evidence for key quality or safety issues, e.g., falls, CLABSI, CAUTI

## ポイント・オブ・ケア（POC＊）におけるEBPの統合

- 最新のエビデンスに簡単にアクセスするための資源またはサイトを確保
- EBPを包含し職務記述書や能力評価に用いる
- 主な患者診断名に関するウェブサイトの内容をCARSを用いて評価：CARS=C-Credible:信頼性、A-Accuracy:精度、R-Reasonable:妥当性、：S-Supported：裏付け
- 主要な質または安全の問題に関する実践的な根拠について検討。例：転倒・転落、中心ライン関連血流感染（CLABSI）、カテーテル関連尿路感染（CAUTI）

30

## Teamwork & Collaboration

- *Old – Work side by side with others while focusing only on nursing care*
- New - Function effectively within nursing and inter-professional teams, fostering open communication, mutual respect, and shared decision-making to achieve quality patient care

## チームワークと連携

- *旧 ―他の職種と一緒に活動しているときでも、看護ケアだけに注目していた*
- 新―質の高い患者ケアを実現するために、看護職と多職種から成り立つチームの中で有効に機能し、開かれたコミュニケーション、相互の尊重、連携の意思決定を分かち合う

31

## Key Message

Safe, effective, satisfying patient care requires teamwork, collaboration with and communication among members of the team, including the patient and family as active partners.

## キー・メッセージ

安全で効果的、かつ満足できる患者ケアを行うには、積極的なパートナーとしての患者と家族を含むチームの形成、メンバー間のコミュニケーションそしてチームワークと連携が必要である。

32

## But Realities Differ…

- Nurses in the operating room described collaboration as having input into decision-making, while physicians described it as having their needs anticipated and directions followed
- MDs routinely rate collaboration more highly than nurses

## しかし、現実は必ずしもそうではなかった…

- 手術室で働く看護師が思い描く連携とは、自分たちの意見が意思決定に生かされることだったが、一方、医師が考える連携とは、自分たちのニーズを予測した上で、指示に従ってもらうことだった。
- 医師の方が日常的に看護師よりも連携を重くみなしている。

33

## New thoughts about the team

- Less about one leader for all situations – and more about who has the necessary skills
- When can the patient and family lead?
- What's the difference between a team of experts and an expert team?

## チームに関する新しい考え方

- 1人のリーダーがすべての状況に対応するという考え方が薄れ—
  必要なスキルを持っているのは誰かと考えるようになっている。
- 患者と家族が主導できるのはどんな時か。
- エキスパートの集団であるチームと、エキスパートチームは、なにがちがうのか。

34

## An expert team - (Salas et al, 2006)

Each member understands the

- Scope of individual strengths
- Skills at communication/conflict resolution
- Philosophy of 'got your back'
- Clear leadership competencies
- Joint responsibility to help each other
- Shared goals and accountability

## エキスパート・チームとは

（サラス等、2006年）

メンバー一人ひとりが次のことを理解している。

- 自己の能力の限界
- コミュニケーションや紛争を解決する技能
- 「支え合い」の精神
- 明確なリーダーシップ能力
- 相互に助け合うことへの共同責任
- 目標と説明責任の共有

35

## Practice Challenges Related to Teamwork

- Within nursing
  - building teams—coaching, effective mid-level managers—main reason people leave is because of their supervisor
  - hand offs—high likelihood of errors occurring
- Inter-professional
  - empowerment of all disciplines
  - communication

## チームワークに関する実践上の課題

- 看護師間
  チーム作り—コーチング、有能な中間管理職—離職の主な理由は上司
  - 引き継ぎ—エラーが発生する可能性が高い
- 職種間
  - すべての専門職領域をエンパワーする
  - コミュニケーション

36

## Safety

*Old – focus on individual performance, vigilance to keep patients safe.*

New - Minimize risk of harm to patients and providers through both system effectiveness and individual performance

## 安全

*旧—個人的行為に焦点を当て、患者の安全を守るために、警戒する。*

新—組織の有効性と個人の行為の両方を通じて、患者やケア提供者が損害を受けるリスクを最小化する

37

## Did you know?

- One in 25 hospital patients acquires an infection
- One in 20 adults seeking outpatient care experience diagnostic error
  - ***the failure to (a) establish an accurate and timely explanation of the patient's health problem(s) or (b) communicate that explanation to the patient***
- One in 10 patients experiences some form of adverse event
- One in 4 primary care patients experiences an adverse event associated with a prescribed medication

## 知っていましたか。

- 入院患者のうち、25人に1人が感染症に罹患する。
- 外来診療を求める成人のうち、20人に1人が誤診を経験
  - ***（a）患者の健康上の問題についての診断を正確かつタイムリーに行うことを怠っていること、または （b）そうした説明を患者に伝えることを怠っていること***
- 患者のうち、10人に1人が何らかの有害事象を経験
- プライマリケアを受けた患者のうち、4人に1人が処方薬に関連する有害事象を経験

38

## Safety

Anonymous reporting systems

- 86% of errors with harm not reported

(1/2012, CMS)

## 安全

匿名通報システムによると、

- 有害なエラーの86%は報告されていない。

（CMS、2012年1月）

39

## Integrating Safety at the POC

- Discuss occurrence of "sentinel events" and "serious reportable events" [formerly called 'never events']
- Compare and contrast characteristics of effective and dangerous 'hand-offs' when transitioning patients in or out of an area
- Discuss research on staffing ratios and work hours and relationship to patient safety
- Create a fair and just culture!!

## ポイント・オブ・ケア（POC）における「安全性」の統合

- 「警鐘事象」と「報告すべき重大事象」（以前は「起こってはならない事象」と呼ばれていたもの）の発生について検討
- ある区域の内外に患者を移送する際の効果的な「引き継ぎ」と、危険な「引き継ぎ」の特徴を比較対照
- 要員配置率と労働時間に関する調査、および患者の安全との関連性について
- 公正かつ公平なJust Culture:「安全文化」を創出!!

40

## Changing Culture of Healthcare and Pre-Licensure Education

Moving from a culture of blame –
identifying the individual and providing discipline
- hiding errors and near-misses
- preventing improvement

- 37% nurses reported that they had not reported an error that might be personally or professionally damaging (Cohen, 2008)

## ヘルスケア文化と免許取得前教育の変革

非難の文化からの脱却—
個人を特定して懲罰を科する文化
- エラーやニアミスの隠蔽
- 改善の妨げ

- 看護師の37%が、個人的または職業的な損害を招きかねないエラーを報告しなかったことがあると語った（コーエン、2008年）

41

## - to a just culture

*an atmosphere of trust in which people are encouraged, even rewarded, for providing essential safety-related information - but in which they are also clear about where the line must be drawn between acceptable and unacceptable behavior*

- Creating a learning culture
- Designing safe systems
- Managing behavioral choices
- Focusing on the error-prone environment rather than error-prone persons (Koren et al, 2007)

## —（公平な）「安全文化」に向けて

*人々が信頼され、安全に関する重要情報を提供することを推奨され、また報奨さえ受ける、環境または文化の形成—ただし、その一方で、容認される行動と容認されない行動とは一線を画さなければならないことも、人々がはっきりとわきまえている—*

学びの文化の創出
- 安全なシステムの設計
- 行動上の選択肢の管理
- エラーを起こしやすい人ではなく、エラーを起こしやすい環境に焦点を当てる（コーレン等、2007年）

42

## Quality Improvement

*Old – Routinely updating nursing policies and procedures (and adhering to them)*

New - Use data to monitor outcomes of care processes and improvement methods to design and test changes to continuously improve quality and safety of health care systems

## 質の改善（QI）

*旧 —看護の方針と手順を定例的に更新（そして、それらを遵守）*

新 —データを使用して、ケアのプロセスと改善方法の成果を監視し、ヘルスケアシステムの質と安全をたゆまず改善していく。

43

## Clinical Challenges Related to Quality

- To improve and monitor quality in institutions
  - Incorporate Plan, Do, Study, Act (PDSA) on every unit
  - Data reporting– getting the right info to frontline
  - Creating a culture of quality—not just around reportable measure

## 質に関連する臨床上の課題

- 組織内の質の改善と監視のために
  - あらゆる部門で計画・実行・評価・改善（PDSA＊）に協力する。
  - データの報告—最前線に正しい情報を届ける。
  - 質の文化を創出する—報告できる測定値についてだけでなく。

＊Plan, Do, Study & Act

44

## Overview of Quality Improvement

QI Process: Monitor, Identify problems, intervene and evaluate intervention with ongoing monitoring

Measures/ Observation (Monitoring, benchmarking) → Problem Identification → Cause of the problem → PDSA (small test of change) Plan Do Study Act

## 質改善の概要

質の改善（QI）のプロセス：監視、問題の特定、介入、継続的監視による介入の評価

測定/観察（監視、ベンチマーキング） → 問題の特定 → 問題の原因 → PDSA（小テスト）計画 実行 評価 改善

45

## Small Test of Change

PDSA cycle approach to quality improvement

From the Royal Children's Hospital, Melbourne Australia

## 変革の小規模な試行

質改善に向けたPDSA サイクル

王立子ども病院（オーストラリア、メルボルン）による

46

## Identifying Cause(s) of the Problem

- Root cause analysis: Systematic approach to get to the true root causes of our process problems
  - Five whys
  - Brainstorming
  - Cause and effect diagram (Fishbone diagram)

## 問題の原因（複数）を明らかにする。

- 根本原因分析：プロセスの問題点の真の根本原因に到達するための体系的手法
  - 5つの「なぜ」
  - ブレインストーミング
  - 特性要因図（魚の骨図）

フィッシュボーンダイアグラム

47

## Some Causes of Hand Hygiene Failures

Each requires a very different strategy to eliminate

1. Faulty data on performance
2. Inconvenient location of sinks or hand gel dispensers
3. Hands full
4. Ineffective education of caregivers
5. Lack of accountability

## 手指衛生不良の原因の例

それぞれの要因を排除するための戦略は千差万別

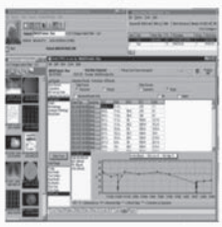
1.行為 に関する誤ったデータ
2.不便な場所に置かれたシンクや消毒液
3.多忙
4.実効性を欠くケア提供者向け教育
5.説明責任の欠如

48

## Informatics (Health IT)

Old – timely and accurate documentation

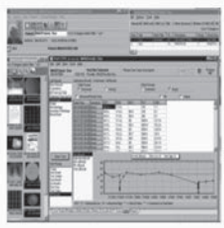
New - Use information and technology to communicate, manage knowledge, mitigate error, and support decision-making



## 情報科学 （ITのヘルスケアへの活用）

旧 —タイムリーで正確な文書化

新 —コミュニケーション、知識の管理、エラーの軽減、意思決定の支援を目的とする情報と技術の使用



49

## Clinical Practice and HIT

- Technology changing workflow—point of care—EHRs
- New clinical monitoring devices and methods
- Inclusion of patients and families
  - Availability of information to families and patients
  - Use of social media, health apps

## 臨床業務とHIT（ヘルス情報テクノロジー）

- ワークフローを変えるテクノロジー—ポイント・オブ・ケア—電子カルテ
- 臨床監視用の新たな機器と手法
- 患者と家族の包含
  - 家族や患者が情報を入手可能
  - ソーシャルメディアや健康用アプリケーションの使用

50

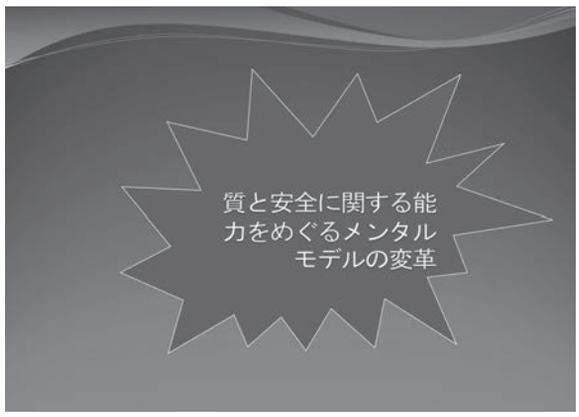
## Incorporating Informatics at the POC

- Orientation and Annually
  - Use Drug libraries
  - Clinical decision support systems
  - Alerts & Reminders
  - Telenursing
  - eICU
  - EHR documentation
- Meetings with staff/students – what's working, what not, ideas for ease and safety

## ポイント・オブ・ケア（POC）における情報科学の導入

- 導入時と年次
  - 医薬品ライブラリーの活用
  - 臨床判断支援システム
  - 警告および注意喚起
  - 遠隔看護
  - 電子集中治療室（eICU）
  - 電子カルテ（EHR）による文書化
- スタッフや学生との会議—効果があるもの、ないもの、簡便化や安全のためのアイデア

51




52

## So what is different?

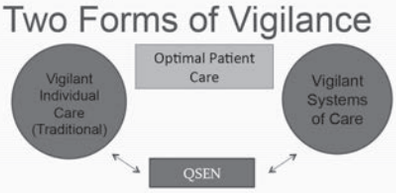
- Everything
- Delivering *patient-centered care* as members of an *interdisciplinary team*, emphasizing *evidence-based practice*, *quality improvement approaches*, and *informatics*
  - "patient, or designee, as full partner and source of control"
  - "all health care providers are part of a team, providing input and clear on each other's roles, including patients and families"
  - "real-time information available to staff to improve quality"
  - "tools supporting point-of-care communication and documentation"
  - "adequate resources to support quality and safety"
  - "each nurse competent and accountable for practice based on the six competencies"

## 違いは何か

- すべて
- *根拠に基づく実践（EBP）、質の改善の取り組み*、および*情報科学*を重視し、*多職種ケア・チーム*の一員として*患者中心のケア*を提供
  - 「全面的なパートナーかつ管理の主体としての患者または指定された人」
  - 「患者と家族を含めて、ヘルスケア提供者全員がチームの一員であり、意見を述べるとともに互いの役割を明確に認識」
  - 「質を改善するために、スタッフがリアルタイム情報を入手できること」
  - 「ポイント・オブ・ケア（POS）のコミュニケーションと文書化を支援するツール」
  - 「質と安全を支える適切な資源」
  - 「看護師一人ひとりが6つの能力に基づき実践を行う能力と説明責任を持つこと」

53

## Quality and Safety: Two Forms of Vigilance




- Patient Centered Care
- Teamwork & Collaboration
- Evidence Based Practice
- Safety
- Quality Improvement
- Informatics

Mary Dolansky
2012 QSEN National Forum

## 質と安全: 2つの形のビジラント

- 対象者・家族中心のケア
- チームワークと連携
- エビデンスに基づく実践
- 安全
- 質の改善
- 情報科学

マリー・ドランスキー
2012年QSEN全国フォーラム

54

## Moving Along the Continuum: In Education and Practice

Continuum of Systems Thinking

- I will turn my patient
- I will post a note above the bed to remind others
- I will ask other nurses about products to prevent ulcers
- I will look at the ulcer rate on our unit
- I will compare our unit ulcer rate with benchmarks

From: M. Dolansky & S.Moore. *Systems Thinking Scale*, available at:

http://fpb.case.edu/systemsthinking/sts.shtm

End goal (Cronenwett)

- I will work with others to improve our unit's ulcer rate

## 教育および実践における連続的な移行：

システム思考の連続体

- 私が患者の体位交換を行おう。
- 他の人も思い出すように、ベッドの上方にメモを張ろう。
- 褥瘡予防用の製品について他の看護師に尋ねてみよう。
- 自分の病棟の褥瘡発生率を調べてみよう。
- 自分の病棟の褥瘡発生率をベンチマークと比べてみよう。

M・ドランスキー＆S・ムーア、『システム思考の尺度』（*Systems Thinking Scale*）より、出典：http://fpb.case.edu/systemsthinking/sts.shtm

最終目標（クローネンウェット）

- 他の人々と協力して、自分の病棟の褥瘡発生率を改善しよう。

55

## Evidence to Action

## エビデンスを行動につなげる

56

Consistent with

- World Health Organization Standards
- Joint Commission Standards
- Magnet Forces of Evidence
- RN Licensing Exam Framework
- Requirement for accreditation of Schools of Nursing in USA

QSEN 理念は、以下の機関の理念と整合性あり

- 世界保健機関（WHO）の標準
- Joint Commission (米国医療機能評価機構）の標準
- エビデンスに基づいた思考が注目の要因
- NCLEX-RN 看護師免許試験のフレームワーク
- 米国における看護教育機関の認証評価の認定基準

57

## International Organizations Promoting the Core Competencies

- World Health Organization Patient Safety initiative
  - Patients for Patient Safety
  - The London Declaration of 2005
- The Pan-American Health Organization
- Institute for Healthcare Improvement
- International Council of Nurses
- Japanese Council for Quality Healthcare

## コアコンピテンスの向上を図っている国際機関

- 世界保健機関（WHO）の患者の安全イニシアチブ
  - 患者による患者の安全
  - 2005年ロンドン宣言
- 全米保健機構
- 医療改善協会
- 国際看護協会（ICN)
- 日本医療機能評価機構

58

## Ohio Organization of Nurse Executives (2013)

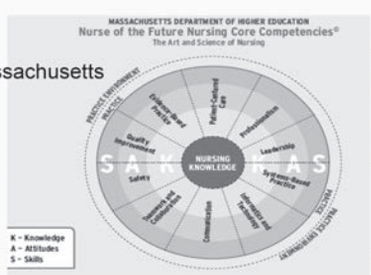
- Recommends the QSEN framework of six core competencies be used to collaborate and develop/ revise models and programs to ensure quality and safety are the basic foundation for all nursing education, practice, and regulation.

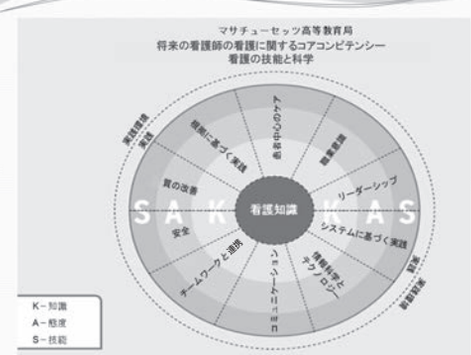
## オハイオ幹部看護師機構（2013年）

- 質と安全を看護に関するすべての教育、実践、法律の基盤とするために連携し、モデルやプログラムの開発や改定を行う目的で、QSENの6つのコアコンピテンシーの枠組みを利用することを推奨

59

Massachusetts



60

Bridging academia and practice in promoting quality and safety

質と安全の促進は
学究と実践の架橋

61

1. It's about creating a Culture, not a Program

It takes time –
It requires leadership support
It requires resources
Technology, staff time, education
It requires a total rethinking of 'how we do business'

- Position descriptions
- Professional development,
- Practice and Quality Improvement Committees
- Partnerships (e.g., School of Nursing)

1。それは、文化を創造することであって、
プログラムではない。.

それには、
・時間がかかり、
・リーダーによる支援や、
・資源が必要である：
（テクノロジー、スタッフの時間、教育）
・それには、どのように業務を運用するかを全面的に見直すことがもとめられる

- 職務記述書
- 専門能力の開発
- 実践と質の改善委員会
- パートナーシップ（例：看護教育施設）

62

## Creating a Culture

- Accelerate uptake
- People and Families *expect* competence
  - They don't say
    - "I prefer you care for me by the standards and guidelines, policies and procedures of 10 years ago".
    - I prefer to be cared for by a "tired nurse" or a "team that does not communicate well".

## 文化の創造

できるだけ速やかに
変革を取り入れること

- 人々や家族は我々に能力を*期待している*。
  - 次のように言う人はいない
    - 「10年前の基準やガイドライン、あるいは方針や手順に沿って私をケアしてほしい」
    - 「『くたびれた看護師』や『コミュニケーションがよくないチーム』にケアしてほしい」

63

## 2. It's about creating a Culture of Safety

- Acknowledge high-risk nature of our work and commit to achieve consistently safe operations
- Provide blame-free environment where individuals are able to report errors or near misses without fear of reprimand or punishment
- Engage nurses in identifying problems and seeking solutions
- Decrease hierarchy & encourage collaboration across ranks and disciplines to seek solutions to patient safety problems
- Organizational commitment of resources to address safety concerns

## 2.大切なことは安全の文化を創造すること

- 私たちの業務はリスクが高い性格のものであることを認識し、常に安全な業務を実現することに全力を尽くす
- 叱責や懲罰を受けることを危惧することなく、個人がエラーやニアミスを報告することができるような非難されない環境を提供
- 看護師が問題の特定と解決策の探求に参画
- 患者の安全の問題についての解決策を見つけるために、ヒエラルキーを減らし、階層や領域を越えた連携を促進
- 安全に対する懸念に対処するために、組織的に資源のコミットメントを行う

64

## 3. It's about creating an environment that supports nurses practicing nursing

- Help all nurses learn and use current evidence
- Provide access to online sources of evidence at all work areas
- Assure adequate staffing and scheduling for release time to participate in education and practice development activities

## 3. 大切なことは、看護を実践する看護師を支援する環境を生み出すこと

- すべての看護師が最新のエビデンスを学び、活用するように支援
- すべての業務領域において、エビデンスのオンライン情報源へのアクセスを提供
- 教育および実務能力開発のための活動に参加する時間を割けるように、適切な要員配置とスケジューリングを保証

65

## 4. It's about creating an environment that offers high quality, safe patient care – every time, every patient

## 4.大切なことは、常にすべての患者に対して、質が高く安全な患者ケアを提供できる環境を生み出すこと

66

## Overcoming Barriers to Quality and Safety

- Knowledge
- Skills
- Attitudes

## 質と安全に対する障壁の克服

- 知識
- 技能
- 態度

67

- What is a change you would like to see accomplished to improve quality and safety?
- Whose support do you need to make significant change?
- Who would be helpful allies in this process?
- What do you want to learn more about?

日常の貴方の実践において、

- 質と安全の改善を図るために、貴方は何を変えたいですか？
- 大規模な変化をもたらすためには、どなたに支援を求めますか？
- このプロセスにおいて力を貸してくれそうな仲間は誰ですか？
- どんなことについて、さらに詳しく学びたいですか？

68

## Attendees

- Why are you here?
  - To create a sea change
- Why is it important?
  - We need the knowledge, skills and attitudes for today's and tomorrow's health care arena
- Why does it matter?
  - Patients lives are at stake

## 出席者の方々へ

- 何のためにここにいますか？
  - 根本的な変化を生み出すため
- なぜ、それが重要なのですか？
  - 現在と未来のヘルスケア分野にとって（質と安全についての）の知識と技能と態度が必要
- なぜ、それが問題なのですか？
  - 患者の生命がかかっているから。

69

## CHANGE THE WORLD OF HEALTH CARE

- Start where you are
- Use what you have
- Do what you can
  - A. Ashe

## ヘルスケアの世界を変えよう

- いまいる場所で始めよ
- いまあるものを使え
- いまできることをやれ
  - A・アッシュ